

佛敎說話
一休和尚

大屋徳城著
法文館發兌



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



持106
506

說佛友

一休和尚

大正
2. 10. 18
内交

和歌集
目次

目次

- 第一回…一休さん……………一
- 第二回…金閣の春……………一七
- 第三回…梅の宿……………三
- 第四回…生ひたち……………五
- 第五回…鴉の聲……………六
- 第六回…南船北馬……………八
- 第七回…佛鬼合戦……………一〇
- 第八回…風流三味……………一七
- 第九回…歌問答……………一九
- 第十回…霜くづれ……………二五

和

尚

休

一 休 和 尚

大 屋 德 城 著

第 一 回 一 休 さん

門松や冥土の旅の一里塚

めでたくもありめでたくもなし

たれでも知つてをられるやうに、人の喜ぶ一年一度の
元日に、千門萬戸の春の影を翠にこめて立ちならぶ門松
の間に、ほろゑひ加減の禮者が、美はしい禮服をつけて
西に東に、左往右往いたしてをる間を、奇妙にも、布の

○

一 休 和 尚

夜もすがら佛の道をたづぬれば

わがころにぞたづぬいりける

破れ衣に、わらぢはき、竹の杖をもつて、其のあたりに、
ざれかうべをのせて、右の歌を歌つて、春の粧ひのうる
はしい間を、何か一かどの見識でももつてをるやうに、
えらそりな顔してかけまわる和尚がある、其の姿といつ
たら、まるで、どこの乞食か分らぬやうなふうたい。

乞食坊主！

乞食坊主！

全くの乞食坊主た!!

氣違坊主！

氣違坊主！

全く氣違に違ひない!!

可笑しいなア！
可笑しいなア！

どこの坊主たらう!?

馬鹿ね！

糞和尚奴！

阿呆奴！

糞坊主！

と若い者も、老いたるも、

忌々しい！

縁喜が悪い！

と眺める程のものは、眼ひき、袖ひき、笑ふてをるもの

もあれば、怒つてをるものもある。女小供はクスクス笑つて居るのや、物かけに逃げかくれてをるものもある。其の間を平氣の平左衛門で、破れ衣の袖をまくり、竹の杖かしらのざれかうべをふり回して、大またにあるく和尚はたれでありませう。

むかしから、多くの書物にかゝれ、お話しに話され、或は説教の種子に使はれ、或は講釋師の張扇に叩かれて大正の今にも相かはらず、面白い坊さん、洒脱な坊さん大禪師として崇拜されてをる和尚は此の和尚である。或は又繪にかゝれ、一枚摺の江戸繪などに刷り出されて、都や田舎の娘子供にまで、おなじみのあるのは此の坊さ

んであります。

此の坊さんは誰でありませうか。いはずと知れた一休さんである。一休和尚である。一休禪師であります。京都は紫野の大徳寺に居つた大和尚であります。

門松や冥土の旅の一里塚

めでたくもありめでたくもなし

とにかく變りものには相違ありません。世に此の大和尚を知らぬ人がありませうか。恐らく津々浦々のはてまでも、此の大和尚の名を一度も聞いたことがないといふやうな人はありますまい。そんな女子供でも、此の和尚さんの名は知つてをる筈であります。

釋迦といふ徒ら者が世に出で、

多くの人を迷はするかな

之れも一休和尚の歌であります。お釋迦さんは佛教の開祖でありまして、佛教信者にとりては、此の上もないたつといお方であります。釋迦牟尼佛と申しまして、佛様で、我れ我れに尊いみ教へを説いて下さつた第一番の佛様であります。夫れを何事ぞや。徒ら者と罵つてをる。そればかりか、此の徒ら者が世の中に生まれて來たばかりに、多くの人を迷はするのである。誠に困つたことである。歎息いたしてをるのであります。

禪宗といふ宗旨は、見識の高いお宗旨でありますか

ら、昔も今も、皆えらさうなことをいつて喜んでをる人も少くはないのであります。併し一休和尚のやうに思ひきつて、而も大和歌で、罵つてをるのは少いやうであります。「釋迦何人ぞ、我れ何人ぞ」と威張る人は澤山あります。此の歌は夫れよりも、一層むき出して、強く感ずるので、一休和尚の罵り方がいかにも、ひどいやうに思はれます。いな、たゞひどいのではない。何かすねて、殊更に惡口してをるやうに思はれます。このうた一つよんでみても、一休和尚といふ人は並み並みの人ではない、餘程のかはりものであつたに相違はありませんであります。

ゆく水に數かくよりも墓なきは

佛をたのむ人ののちの世

これも一休和尚の作であります「ゆく水に數かくよりも」といふのは、流れてゆく水に數をかく、即ち數字をかく一二三とか、百千萬とか字をかく、流るる水に字をかいても、其の形が残るものではありませんが、夫れよりもつと墓なく、詰らないのは「佛をたのむ人ののちの世」とありまして、未來助けてくださいと、佛様を相頼み申す、そらいふ信心をする人の未來である。そんな人の未來はどたよりにならぬものはないといふ意味であります。一寸よんでみますると、何といふ思ひ切つた悪口でござ

いませうか。後の世を頼む人こそ、助けてもらふのである。未來は頼もしいと、譽めてをかねばならぬのに、其のくさし方のひどいことは、どうもまともに受取れぬ位であります。これも又一休和尚の變りものであるところを示してをるのであります。

嘘をつき地獄へ落るものならば

なきことつくる釋迦いかにせん

これも一休和尚の歌であります。嘘をつけば、妄語罪といつて、十惡の一つで、地獄に落つる種子であります。それで、うそをついてはならぬ。うそをつけば、後來、惡處に落つると教へねばなりません。一休和尚は

反對に、そんな事があるものか、うそをいつて、地獄におつるといふならば、お釋迦様は一體どうするか、地獄たの、極樂たのと、ありもせぬことを造り出してござるのに、若し本統に左様ならば、お釋迦様こそ地獄へゆかれるに相違ない、ませツかへして居る。

これで見てもみまると、一休和尚といふ坊さんは、とにかく、すね者の、ませツかへしが専門で、人が右といへば、いやいやながらも、左といひ、人が左といへば、必ず右といふ。箸にも棒にもかゝらぬ。煮ても焼いてもくはぬ木偶の坊のやうに思はれます。一休和尚。一休和尚と人が珍重がるから、つけ上つて、太平樂をいふ野狐

禪のなりそこなひのやうに思はれます。

正月の元日から、縁喜でもない、されかゝへを杖の先にさしつけて、回禮者などに、みせつけては、

門松や冥途の路の一里づか

なと、いかに、自分獨り悟つたやうな顔をしてをる生ざどりの氣障な坊主のやうに思はれます。併し夫れは只うちみたところが、そふみゆるばかりで、實際はそんな氣違坊主でも、きざ才子でもなかつたのであります。何しろ大徳寺の住職であつた大宗師でありますから、野狐では決してありません。これは世に慣るところがあつたからであります。こんな、一休和尚は變ちきりん

であつたが、たゞ傑かつたばかりでなく、人を感化する力のすぐれてえらかつた人であります。

今日の人はよく、お説教や講話などで人を感化しようとするのでありますが、此の大和尚はそんな特別なお説教とか、講話とかをなさるのではありません。手をあぐるにつけても、足を一つ下すにつけても、一々多くの人たちを感化なされたのであります。禪宗の言葉で申しますると、一擧手一投足皆禪を説いた人であります。そこで、一休和尚のお話といへば、いかに可笑しいお話の中にも、いかにきつ苦しいやうなお話の中にも、チヤンと教訓が含まれてをります。決してたゞの滑稽ではあり

ません。

一休和尚の滑稽談や、頓智談は世の中に箒ではく程澤山あります。又夫れを面白をかしく説く人は、説教者にも、講談師にも澤山あります。私のやうな人間がかれこれと説く必要は決してありません。もしもたゞの滑稽談をあつめるのなら、私は御免を蒙りたい。

そこで、私が説話叢書の中に、一休和尚のおはなしを入れましたのは、少くとも私には私だけの理由があり、見識があるのであります。たゞ面白い。たゞ可笑しいといふのでは私に取つては面白くない。可笑くない。そこで、一休さんのお話の中から、真に面白いと思ふお話し

どこから来て、どこへゆくのであるか。死んでから魂は如何やうになるものであるかといふやうなことを教える學問であります。ソクラテスはかやうな高尚な學問をなさつた大學者でありましたが、其の頃は何事も何事もうちこわすといふことが流行しました時代でありましたが、此の先生は素戔で、ギリシヤの市街に出て、青年の人たちにあへば、いろいろな世間話から、引き入れて、つるには高尚な哲學の話を説いてきかせられたといふことであります。野菜や肉類の積んである市場の角でも、酒瓶や樽の置いてをる酒屋の横町でも、どこでも、かまはずあひさへすれば、何かの話しから、高尚な話に引

き入れられたので、「青年の友」といはれた人があります。一休さんも、私が思ひまするにちやうどギリシヤのソクラテスのやうな人であつたらうと思はれるのであります。してみると、紫野の大和尚は日本のソクラテスといふても差支あるまいと存じます。そこで、此の日本のソクラテスの、お話が大層意味の深いこととなるのであります。

第二回 金閣の春

此の世をば我が世とぞ思ふ望月の

かけたることもなしと思へば

むかし、むかし、日本の國がまた今のやうに四民平等

といふ風にならぬ前に、都は今の京都にあつたのであります。其の頃は、藤原氏が大層榮へてをりまして、朝廷の上は申すに及ばず、天下の事は何事も藤原氏の思ふやうにならぬことはなかつたのであります。

皆様は大和の國の多武の峰といふところにおまゐりなされたことがありますか。長谷寺——あの觀音さまで名高い長谷寺のある其の直ぐちかくにある山であります。今は神社になつてをりまするが、昔はお寺であつたのであります。此の多武の峰といふところは、大層けしきによいところでありまして、春はさくら、秋はもみぢのからにしさ、色とりどりのながめに富んでをるのであります。

十三重の塔が赤い樓門のほとりに寂しうたつてをりまするが、此處に大職冠鎌足公のお墓があります。此の鎌足公が藤原氏の先祖になるお方でありまして、其の後、藤原氏は四つの家に分れましたけれど、何れも何れも中々繁昌しましたお家柄で、平安朝と申して、もとは奈良にあつた都が、今の京都、即ち、平安京に遷されましたから、頼朝公が相模の鎌倉といふところに、幕府を開かれるまでの間の四百年たらずをいふのであります。此の平安朝には、藤原氏の繁昌は盛んなものでありまして、自分の娘を天子様に差上げて、妃とすることが代々行はれ、其の一族で、大臣からすべて、朝廷の肝要な位はと

つて了ふといふ風で、其の領地は日本國の大部分を占め
其の勢ひのスバラシサといふものは、全く天子様よりも
上であつたかと思はれる位でありました。その中でも、
道長といふ人は、殊に威勢のスバラしいお方で、天下の
事は思ひの儘にとり行ひ、何一つとして自分の思ひにま
かせぬことはなかつたのであります。あるときのこと、
此の大臣が秋のさかりに、おにはに月を眺めてをられま
すると、ちやうど、秋は九月、もみぢの錦が燃ゆるはか
りにいろづいてをりまする、お庭の木々のあいたから、
十五夜の月はまんまるくあらはれたのであります、其の
月をながめて、一首のうたをよみなされました。

此の世をば我が世とぞ思ふ望月の

かけたることもなしと思へば

といふのであります

此の世の中は、實に思ふやうになつて。自分の娘はか
しこくも、一天萬乗の大君の妃となり、自分は太政大臣
關白といふやうな此の上もないお位に上り、自分の子ど
もや、一家一門の人たちは皆々出世して、わらい位を賜
はつてをる。そして、家は富み榮ゑて、黄金白金くらに
花が咲いてをるといふ有様、お住居はと申せば、金銀珠
玉をちりはめた天人の御殿のやうな有様。何といひ一つ
として不足のない有様である。ちやうど、あの満月のま

んまるく満ちてをるやうに、何一つ不足はない。實の此の世の中は、自分の世の中のやうに思はるゝといふのであります。

道家公がかやうに、秋の月をもてあそび、黄金の酒に酔ふてをられる時には、天下はたれもかれも、みんな太平の夢に酔ふてをつたであります。否々中々そういふ風にはるかなかつたのであります。一方にはかやうに世の中を我が世の中である。あの月のやうに、何一つかけてをるものはない。實にうるはしい楽しい世の中であると太平樂を奏でゝ居るそばに、其の頃の下民は食ふに食なく眠るに家がなく、乞食となつて、あちらへさまよ

ひ、こちらへまよふて居たものが少くなかつたのであります。そして、租税は重く、其の取りたて方はひどかつたので、人民の難儀といふものは並大抵ではなかつたのであります。従つて、道家公のおやしきも、實はかやうなあはれな民のあせや膏をしほつて建てたものであります。

一休和尚の生まれられました時代はちやうど道家公の時代のやうな時代でありました。道家公からは三百年もたつてをりまするが、其の有様は實に似てをつたのであります。そこで、今それに引き合はするため、家道公の驕りのありさまを申しのべましたのであります。

一休さんの時代には、もはや藤原氏が幅をきかせては居りません。世の中は何事も三日みぬ間のさくらかなで同じものが左様にいつもいつも、幅をきかせてをるわけにはまゐりせん。藤原氏にかはつて、足利氏の世の中ではありません。

足利氏といへば、皆様よく御承知の尊氏から始まつてをります。尊氏は名高い賊の氏で、後醍醐天皇さまをないがしろにいたして、北朝の天子様を立て、自分で我儘を行ふた武將であります。北條高時が亡びましてから後醍醐天皇様が政治をなされましたが、時の不運といふもので、逆臣の尊氏が東國の兵を卒ゐて、京都へ参り

どうぞう天下を我ものにしたしましたので、天皇様は大和の吉野の山奥におかれなされて、天下はいよいよ、足利將軍の思ふまゝになりました。

尊氏の子に義詮といふ人がありまして、此の人の子に義満といふ人があります。此の人の三代將軍であります。足利十五代の將軍の中で、一番驕りを極めた人でありまして、一番我儘な振舞ひをいたした人でもあります。此の人は金閣寺を建てた人で、大いに驕奢をなこ、時の天下の富を一人で使つて了ふ人でもあります。公方さまといふたのであります。つまり、徳川將軍を天下さまといふのと同じことでもあります。

うよし濟んだと仰せられました。そして、すつかりお釋迦様のお悟りは迦葉に傳はつたのであります。誠に不思議な有様であります。そこで、禪宗では以心傳心と申しますのであります。

お釋迦様から迦葉にお傳へなされました禪宗は、迦葉尊者から段々とお弟子へ傳はりまして、二十八番目に達磨大師に傳はつたのであります。此のお方は天竺の南方の香至國といふ國の王様のお子様即ち王子に當らせられる尊い人でありましたが、出家をされて、後支那の方へ渡つて來られたのであります。其の時、支那では、國がいくつにも分れてをりましたが、梁といふ國の武帝と

いふお方が大層の信心家で、佛教を大いに保護してをりましたので、大師は先づ先づ梁の國におはいりなされました。

夫れから、武帝におあひになりましたが、武帝は禪宗の高尙な教へがよく呑み込めなかつたのでありますから大師は失望して 嵩山といふ山の中に、ある双林寺といふお寺に引き籠つて、九年の間坐禪してをられました。其の時、慧可といふ人が、弟子になられました。夫れから、禪宗は支那に大層繁昌いたしまして、五家七宗といふ風に分れましたのであります。

斯やうに、禪宗が支那に盛んになりますにつけて、日

本から、支那に留學いたしました僧さんたちが追々と少
しつゝ傳へてまゐつたことは、古くからありましたけれ
ど、榮西禪師が尤も専門に傳へて参られたのであります。
夫れは一休さんよりは殆んど二百年ばかり前の事であり
ます。頼家將軍の御歸依によりて、鴨川の東に建仁寺を
建立され、鎌倉に壽福寺を開かれました。夫れから聖一
國師といふお方が東福寺を建てられましたので、段々と
盛んになりました。鎌倉の北條家は代々此のお宗旨に歸
依をなされましたので、其の後、大覺禪師といふお方が
支那がらみえまして、建長寺が出来、佛光國師といふお
方が、同じく支那がらみえまして、圓覺寺といふのが出

來るといふ次第で、鎌倉では愈盛んになりました。然る
に、京でも、代々の天子様が御歸依あるやうになりまし
て、南禪寺、妙心寺、大徳寺といふやうなお寺も出来ま
した。夫れから、足利尊氏が中々の禪宗信者で、夢窓國
師といふお方が大層信仰いたしまして、嵯峨に天龍寺と
いふ大伽藍を建立いたしました。其の弟の直義といふ人
も又兄に劣らぬ信者で、日本國中に一國一寺宛禪宗のお
寺を建立されやうとされました位でありますので、禪宗
の勢ひといふものは、スバラシいものでありました。か
く一國に一寺宛禪宗のお寺を建てる、國家の安全を祈る
といふので、安國寺といふ名前にいたされましたので、

昔奈良の都の時代に。恐れ多くも聖武天皇様が國毎に國分寺をお建て遊ばされましたが。夫れにまねて建てたのであります。併しこれは皆な出来上らなかつたやうであります。夫れから、相國寺や等持院といふやうなお寺も出来まして、其の盛んなことは、中々今日、禪宗の有様ではありません。之れには、さすがの、叡山の山法師も後には指もさせなかつたのであります。何しろ、天下を掌に握つてをる將軍の歸依のあることでありますから、御用宗で、其の勢ひといつたら、スバラしいものでとても今日ではお話が出来ぬ位であります。そして、夢窓國師といふお方は大層な徳者でありますと共に、智

者でありました上に、其の又お弟子にはえらい人があちらからも、こちらからも、寄り集まつてまゐりましたので、其の盛んなことといふものは、これまた我が國の歴史に類のないことであります。

かやうに盛んになりましたので、猫も杓子も、我れも我れもと禪宗の坊さんになりたいと出家いたしましたものがありますから、段々とわるいものゝ出来、又盛んになれば弊害といふものゝ伴ふのは、何事も免れぬところでありますやうに、禪宗も大分弊害が出来てまゐりました。夫れを憤慨されたのが、原因となりまして、一休さんは奇妙な行ひをなさるやうになつたのであらうかと思

はれます。其のことは後に詳しく申し述べます。

第三回 梅の宿

きのふまでは、ハラハラと降りしきつておりました雪も、けさは晴れて、野にも山にも、うるはしい霞がたなびいてをります。さすがに、春は春で、一夜の中にも、かはればかはるけしきであります。夫れも或は詠むる人の心からであるかは知りませんが、大晦日と元日とは全くちがふ。殊に今のやうな新暦ではなく、昔は舊暦のことでありますから、其の時候のあたゝかさも全く今のやうではなかつたのであります。

春立つといふばかりにや三芳野の

山もかすみて今日は見ゆらん

と古人の歌もありまするやうに、全く一夜の中にけしきはかはるものであります。見渡せば、治まりかへる御代のすがたをあらはして、鶴は子鶴をつれて、晴れ渡つた空に舞ひ、都大踏には、あちらにも、こちらにも、千門萬戸翠のいろに、君が八千代を壽く門松はうるはしうならび立ちてをります。ことに、天子様の御すみかには、いかめしい舍人の人たちの警固の聲おこそかに、拜賀にまゐる人がつゞきわたつてをります。又將軍のお邸は其の頃、室町にありましたので、大名小名がけふを晴れと

方へ申しぶみを持つた男が淨衣をきて、此のおやしきを
 出てゆくのであります。さても、いかなる譯がらのある
 おやしきでありませうか。賢くも、一天萬乗の天子様
 の御住居の方へ、美しうはあれど、かやうな詫び住居の
 あるじから、申しぶみを上るやうなことがあるとは、さ
 らさら合點がまゐりませぬ。

きけば、けさ程、玉のやうな男の子が生まれたのであ
 ります。時は應永の春。正月の元日。都はづれでありま
 す。これは時のみかど後小松の院の後宮にあたる妃の方
 のわび住居ひ、天子様の落胤をおうみ申したといふので
 あります。

あはれ應永の春よ。

洛西のあしたよ。

うまれいでし緑り子は誰れであります。

お母さんのお名まへはシカと分つてをりませんが、何れ
 は貴いお公卿さまの御身うちか、皇族親王様の御身内か
 であります。生まれた緑り子は千菊丸と申しまして、
 後には、紫野の奥に、徳のかをりを放ち玉ふ大禪師で
 ります、皆様はこれが一休さんであるといふことは、申
 さんでもお察しのことと思ひます。

一休さんは應永元年の正月の元日に、洛西のわびずまる
 で、オギアと此の世へ誕生されたのであります。

昔から、正月の元日に生まれる人は、きつとねらい人になるといふ申し傳へがあるそりです。其の一つの例を挙げますると、かの太閤秀吉も矢ッ張り、正月の元日に生まれたといふことであります。秀吉公は御承知の通り尾張の中村といふところの水呑百姓の子と生まれて、信長公の草履取りから、出世して、天下を掌に收め、終には朝鮮征伐までされた大豪傑であります。一休さんも、正月の元日に生まれられたが、これも紫野に大獅子吼をなされて、其の頃の俗僧共の肝膽を奪ひ、天下を獨歩された大宗師であります。とにかく、正月の元日に生まれられたのは何よりおめでたい話であります。

一休さんのお母さんは或る説によりまするといふと、藤原氏のお方であるといふことであります。もと南朝に仕へた人であるとも申し傳へてあります。其の頃は御承知の通り、天子様が南と北にお在なされました時代でありまして、南北朝の時代と申すので、北の天子様は即ち後小松天皇様、南の天子様は即ち後龜山天皇様で、大和の國の吉野の宮においであそばされたのであります、尤もかやうに分れましたのは餘程前のことでありまして後醍醐天皇様が尊氏の勢ひを避けて、吉野の山へ御はいり遊ばされましてから、尊氏は同じ皇族の中から北の京都にも天子様をお立て申したしたので、かやうに分れた

のであります。尤も應永の元年には、既に兩方が御和睦なされまして、龜山天皇様から、後小松天皇様へ三種の神器をもお授けになり、又吉野の方から京都へ御還幸なされ、天下は無事に一統してをります、ところが、この藤原氏は後小松天皇様へ御仕へ申してをられましたが、御寵愛が深くありましたので、外の官女の人々が大層嫉ましいことに思ひまして、藤原氏はもともと南朝の天子様へお仕へ申してをりましたので、實は畏れ多くも後小松天皇様に害を加へようといふ考へで、宮中にお仕へ申してをるお方であるから、必ず必ず御油斷遊ばされまするなど、天子様へ密々と申し上げましたので、天子様に

も、氣味あしく御思召したのか、とうとう藤原氏は玉のうてなを潜に忍び出て、前に申しましたやうに、都の片田舎にわび住居をなさるやうになつたのであります。洛西とありますから、嵯峨や御室のあたりであります。藤原氏から嫉妬、讒言はと恐ろしいものはありません。藤原氏は決して左様なお方ではありません。まことに淑やかに、而も心のたしかなお方でありました。嵯峨野の奥には昔は小督の局もかくれて居られたこともあります。高倉の院の御思召によつて、仲國が駒を早めて、秋の月をふみ、桔梗、苜蓿、女郎花、露にすたく虫の聲を渡りて、ふけゆく夜半の松風に、琴のしらべをみちしるべに

尋ね迷ふたのも、このあたりであります。

藤原氏は此の詫住居に、玉のやうな千菊丸を抱いて、
いかにわびしく暮されたことでありませうか。千々の菊
とはよく名つけたもの、千菊丸は日かすのたつにつけて、
世の常の子どものやうに、泣くといふこともなく、おと
なしう生長いたしました。

春は御室のあたりの野邊に出て、すみれのなびくそよ
風にふかれながら、いろいろの花をつみては、母上へお
みやげとし、夏は清瀧川のはどりに飛びかふ螢を追ひ、
秋はなく鹿の聲に、母様と身のさちなさをわび、冬は、
山々を埋むる雪をながめつゝ、行末のことを思ひわづら

ふ母上に、氷る拳を暖めてもらふたこともありませんが、
併し、月日は回る小車のやうに、立ちかへりまして、六
つの春を迎へました。

梅咲く宿に、千菊丸が段々と生長いたしてをりまする
間に、お母さんのお話しを少しばかりいたしませう。

此の藤原氏は決して並み並みの婦人ではなかつたので
あります。固より一休さんのやうなえらいお方のお母さ
んでありますから、決して凡庸の人でなかつたであら
うとは、唯れしも思ふところでありませうが、夫れは中
々我れ我れの考へてをる以上に、傑かつた人であります。

一休さんのまた修業中のことであらうと思はれますが、此のお母さんから一休さんへ贈られた手紙があります。其の手紙を読んでみますと、どれ程えらかつた人であるかといふことが、すぐ分るのであります。其の手紙にはかように書いてあります。

我ら娑婆の縁つき無爲の都におもむき候。御身よき出家に成り給ひ、佛性の見をみがき、其まなこより、我ら地獄に落るか、落ちざるか、不斷添ふか、添はざるかを見玉ふべし。釋迦、達磨をも奴となし玉ふ程の人に成給ひ候はゞ、俗にても不苦候。佛四十餘年説法し玉ひ、つるに一字不説とのた玉ひし上は、我と見、我

と悟るがかんやうに候。何事も莫妄想、あなかしこ。

九月上旬

不生不死の身

かへすかへすも、方便の説をのみ守る人は、くそ虫と同じ事に候、八萬の諸聖教をよみても、佛性の見をみかゝずんば、此の文はどのことも解しかたかるべし。

これとても假初ならぬ分れては

かたみともみよ水莖のあと

「我ら娑婆の縁つき、無爲の都へおもむき候」とかいてありますから、お母さんが今はのきはに書いて、一休さんに贈られたもので、いはゞ、遺言の手紙であります、其の中にかいてあることは、ほらい見識の高いことであ

りまして、中々世の常の女のいふやうなことではありません。つまり、坐禪して、智慧の光を磨いて、あつはれの大宗師となり、お釋迦様も、達磨様も、自分の下部や、弟子位にするやうな大見識で修業をして下さい。方便のためにお釋迦様がお説きなされたところにへばりついて本統の佛のみ教をも知らぬやうなことでは役に立たぬ。八萬四千の御聖教は月を指す指のやうなものであるから、其の指たる御聖教の文句に迷ふて、御聖教の本統の御心を知らぬやうなことでは、誠にいひがひないことである。大に奮發して、修業を心がけて下さい。わたしは只今此の世をたちて、未來へ赴くのでありまするが、わたし

が、迷ふか、迷はぬか。よくよく佛性をみがいた眼で眺めて下さい。わたしは不生不死と申して、二度と再び生れも死にもせぬ涅槃の道理を悟つたみであるぞよ。何よりも、人にたよらず。方便にとりつかず。我れと我が眼を開き、我が心を磨いて、眞の佛道修行をなし給はれよ。これが、今はのきはに申してをくかたみであるといふ意味であります。

斯様にえらいお母さんを持つてをられた一休さんのことでもありますから、此のふみをみて 定めて奮ひ起つて、大恩あるお母さんのみをしへを反故にしまいといふ大決心、大勇猛心を起されたことであらうと思はれます

一休さんが元々世の常の子供でないところに、此のお母さんが又右のやうに、すぬけてえらいお方でありましたので、ちやうど、よい種子をよい畑に蒔いたやうなもので、立派に芽をふき、立派な枝を出し、うるはしい花を咲き、よい實を結ぶといふことは疑ひないことであります。よい上にもよいお母さんをもたれた千菊丸は誠に羨しいお方であります。これにつけても、家庭の教育といふものがいかに大切であるかといふことがお分りになる事であらうと思はれます。

一休さんはつねにお母さんを大切になさることも非常なものでありまして、お母さんのところへは屢手紙を上け

て慰めて居られたのであります。其のおたよりが今日でも假名法語として残つてをりまするが、夫れは夫れは親切に行き届いたものであります、お母さんの御身の上を案んじて、未來のゆくさきのこと、此の世の安心のことまで委しくかき載せてあります、長いので、此に引用することが出來ませんのは、甚だ残念であります、實に親子の情の厚かつたことは、後の世の手本であります。「此の母にして此の子あり」と申す諺がありまするが、一休さんは誠に立派なお母さんをもつて居られたのであります。

第四回 生ひたち

花咲き花散りて、年は夢のやうに逝いて了ふ。千菊丸が此の世の初聲を擧げましてから、嵯峨のあたりにも、年はたちて、早や六歳の春を迎へました。

むかしも、今も、うるはしき日向に咲いてをりまする花は人の眼にもつき、賞められもし、一生をあたくかい光の下に暮すのでありまするが、ひかけに生ひ出でた草になりますると、折角春になつて、蕾をもつても、日の恵みが少いので、容易に花を開くことが出来ませぬ。それと、同じように、千菊丸も尊い天子様の御ちすぢを引

いてをるとは申せ、世の讒言に依つて、玉の宮居を出された位のお母さんの子でありまするから、やはり日向の草ではない、日かけの花であります。そこで、外の方々のやうに、親王様となるわけにもまゐりません。尤もそのころは、外の親王様でも、大抵は御出家あそばされまして、御門跡様におなりなされるのが、習はしでありますたので、たとへば、千菊丸があたくかい日向の花と育てられましても、佛門に歸するといふ因縁はあへてうすいではありません。殊に日かけの育ちであつてみれば佛縁は一入ふかいわけであります。

其の頃、京都に安國寺といふお寺がありました。これ

は前にお話しした直義が日本國中に一國一個寺宛建てた
お寺の一つであります。此の安國寺に、像外鑑禪師とい
ふ長老さんがありました。

お母さんの藤原氏はつくづく我が子のゆくすゑを考へ
てみられますと、どうも、此の儘に朽ち果てさせるは
いかにも残念である。ついては、俗人となつて戦塵の間
に馬を驅けるといふも、尊いお血すちの人のなさること
ではない。むしろ佛門に歸して、修行をいたし、立派な
悟りを開く人となつたならば其の身の仕合せはいはずも
あれ。我が本懐も之れにすぎたことはないと思はれまし
たので、千菊丸を出家させるといふ心になられました。

そこで、未だ頑是ない六つの千菊丸の手を曳いて、安國
寺の門を叩かれました。安國寺では、とこのお方分ら
ねど、何しろ大層氣品の高い立派なお方が、可愛らしい
稚兒の手を曳いて、長老に面會したいといはれるのを
みて何ぞふかい仔細があることであらうと思ひまして、
其の旨を長老にお話しいたしますと、長老はにつこと
打ち笑み、夫れはよい子どもが参られた。こゝへお通し
申せといはれましたので、藤原氏は千菊丸をつれて、長
老のお室へ通うられました。

長老はひげの白いお方で、まことに、柔和な相の人で
あります。藤原氏と千菊丸は恭しく、兩手をついて、事

の次第を細やかにお話し申し、どうか、此の子を立派な
 智識に育てたり存じます。夫れにつきまして、何とぞ
 あなたさまのおそばにおつけ下さいまして、御育てを願
 はれませうならば、本懐のいたりにぞんじます。とい
 とねんごろに、おたのみなされましたので、長老は一も
 二もなく、引きさうけられ、左様な次第であるならば身
 かへても、御世話をいたしませう程に、必ず々々、おこ
 ろろ安く思召されよとありましたので、藤原氏の喜びは
 何にたとへるものもない程で、直に千菊丸を長老へお引
 合せいたされました。

今までは、たとへ詫びすまるとは申せ、都の外のいは

りとは申せ。母上様と二人あたゝかく住んでをられました
 たのに、今は東をみても、西をみても、知らぬ人ばかり
 の大きなお寺の中に、唯ひとり残されました千菊丸の心
 中はいかに寂しかつたことでありませう。

それでも、おとなしい千菊丸は母上様のあつい御情け
 と、ふかいお心づくしを無にするやうな子どもではなかつた
 ののであります。じつところらえて、此の廣い廣いお寺
 の中に、たたひとり暮らされました。春雨の絲のやうに
 ふる夕べ、かりが悲しそりに鳴く宵などは、あつい涙が
 こぼれることもありました。

長老は千菊丸に周建といふ名前をつけて下さりました。

夫れから、尊いお經文を覚え、友たちの人たちからもいろいろとみ習ひ、十二歳になられた時には、大分才智もみえて参つたといふことであります。

其のころ寶幢寺といふお寺で、清叟仁といふお方が維摩經の講釋をなされたことがありました。千菊丸の周建は幼いながらも、此の奥ふかいお經の講釋をきくにいられて、いかにも熱心に聴かれましたので、多くの人たちが大いに感心されたといふことであります。栴檀は二葉より香ほしと申すのもかやうなことをいふのであります。

夫れから、東山の慕喆舉禪師といふ人があります。

此の人は大層詩を作ることが上手でありましたので、周建は此の人に就いて、詩を作ることが稽古されたのであります。其のころの禪宗の坊さんは、中々詩や文章をつくることに熱心したものでありまして、何れも、何れも詩文が巧みなのを以て自慢とした時代でありますから、詩文の上手といふことは、禪學の修行の外に、大層必要なことであります。詩文の上手な人はズンズン出世が出來たものであります。

周建は中々才智すぐれた少年でありますから、詩にかけても、ズンズン上達いたしました。十三歳のころは、中々立派な詩を作ることが出来るやうになりました。

此のころの禪宗は大層盛んであると共に弊害もまた澤山ありまして、何れも何れも、立派なきものを欲しかつたり、金襴の袈裟を着たがつたりして、ちやうど、女子供がりつはな衣裳を着て喜ぶやうに、位や衣裳や、門地などを競ふて威張つたものであります。周建も洗ふてみれば、立派なお血すちのある人でありますけれど、何しろ表てむきに左様なことをあらはすわけには参らぬので、唯の周建で、かくれてをらねばならなかつたのであります。高貴のおちすちに生まれてをりながら、事情のためにつまらぬものどもの下に屈伏してをるのは、まアよいとしても、そんなつまらぬ坊さんたちが、我儘がはにふる

まふのをみては、少年血氣の周建のこと、たまつては居られなかつたらうと思はれます。而も夫れが立派に修行の出来た人でもあることか。修行はサツバリ出来ても居らぬくせに、只親の威光や、門閥の勢ひで、我はがはにふるまふのでありますから、尙さら癩にさわらざるを得ぬのであります。周建は小さいときから、こんな境遇に壓迫せられて、生長されたのでありますから、其の不平は折もあらは、晴しはを求めてをつたに相違はありません。此の不平不満の卵は、久しいあいた、はらの底にかくれて居りましたが、後年、周建が位置を得て、一休和尚となり、大徳寺に住するやうになつてから、爆

發して、いろいろと奇妙なふるまひをされるやうになつたのであります。周建といへども、決して決して、はじめから、うき世を悟了した人ではなかつたので、我れ我れ凡人のやうに、不平も不満もあつたのであります。ことに、十五六才ころからは、其の氣分は大層みえてをるやうであります。

いつの世でも、門閥とか、門地とかいふものがあります。夫れを利用して、好い位置を占めたり、利のあることを獨りで占めて了ふなどといふことは、得てありがちのことで、これはひとり今日あるばかりでなく、一休さんの周建時代には殊にひどかつたのであります。併し何

事も門地門閥で占領して了ふといふことになります。その門地門閥の外の人、絶望して了ふて、もはや奮發して、そんな人と競争しやうとする人が段々少くなつて了ひます。殊に心の弱い人はもうすぐにあきらめて了ひます。只心の丈夫な人が大勇猛心を振り起して、夫れらの寄生虫のやうな奴をふみにじらふとかゝるのであります。併し閥といふ奴は中々一人や二人の力で破ることが出来るのではない。そんな連中が同盟してをりまするので、いかに、えらい人が出て、自分の力で破りするといふやうなことは出来るものではありません、そこで、えらい人も始は真ともからブツかつてをりまするが

それが利きめがないといふことになりまますると、今度は横合ひからブツかるやうになるものであります。そこで、勢ひ、奇矯な行ひや、奇矯な言葉を出すやうになるものであります。

周建も矢つ張り人間であります。えらくとも人間は人間であります。周建は立派にものが出来ても、門閥門地がない。いつも、ろくに出来もせぬ門閥屋のため、壓迫される。どうしても、かつことが出来ぬ。そこで、不平は段々に高まつて集る。知らず知らずの中に、言葉が針を含んで来るやうになる。振舞ひが並々でなくなる。凡そ人のすることが一つとして氣に食はぬ。併しまトモか

ら攻撃いたしても、そんな奴等には、手答がない。そこで、常軌を逸したことをやつて、俗輩を警めやうとするかやうになれば、なる程、俗輩からは、變りものたとして、いよいよ以て其の仲間には入れられぬことになる。周建も定めてそんなひでいめに遭ふことが少からずあつたことであらうと思はれます。そこで、段々と妙な行ひをするやうになつて参りました。一休和尚はかやうにして出来上つたのであります。

時の坊主どもが、うはべには、殊勝な風をいたして居りながら、かゆにかくれては、いろいろと法と背いた非法不如法のことをする。それが和尚の氣に食はぬ。坊主

どもは、精進不殺生といつて。うはべに五戒をたもち、魚を食べぬが、うしろではたべてをる。不邪淫戒を守つて、うはべは殊勝にかまへてをつても裏面ではいろいろと醜體を演ずる。夫れを毎日みさゝしてをる周建は、其の偽善のありさまが氣にくはぬ。そこで、不平は益激しくなる。表むきにも魚を食ふ、遊女屋に出入する。始めはツラあてにやる。後には平氣でやるといふやうになつて、もはや争はれぬ不平の塊りが出来上つてをる。

周建の二休和尚とて、生まれる時から、つむじが曲つてをつたのではありません。浮世の波風にふかれ、うたれて、終にかやうになつたのであります。一休さんのや

り方はなまぐさ坊主の出来そこないのやうなところも澤山あるにはそりるありませんけれども、夫れは時勢の罪であつて一休さんの罪ではありません。若し時勢がよかつたら、一休さんは虫も殺さぬやうな人になつてをられたであります。

周建は爲謙翁といふ人について、夫れから坐禪を勉強されました。此の爲謙翁といふ人は、花園(妙心寺)の流れを汲んだ人で、大層徳の高かつたお方であります。周建は大層此の人が氣に入つたとみえまして、廿一才の時まで、此の人の下に坐禪を勉強されたのであります。しかるに、廿一才の暮に、此の人はなくなりましたので、

周建は己むを得ず、京都を去つて、江州へ往き、石山寺の観音様に祈請して、悟道を祈られました。比良の山にふり積る雪を眺め、石山に照る寂しい冬の月を仰いで、いかに逝きし師を偲ばれたことでありませうか。

第五回 鴉の聲

周建は五年の間仕へてをりました師を失ひましたので、其の悲しみのかはかぬ袖をかゝへて、石山の観音堂に、早く悟りの開けるようにと、熱誠こめて祈りました。かやうにいたしてをる中に、廿一歳の冬も暮れましたのであります。

江州には、其のころ禪宗の學者で隠れてる丈人も少くはなかつたやうであります。石山と同じように、近江八景で名高い堅田の里に、華叟といふ名高い大徳が居られました。

周建は石山の御堂をたち出でまして、江州のあちらこちらとさまよひ、故師に劣らぬわらい師匠はないものかと尋ねてをられます。矢走の渡しにかゝりましたころは月日もたちて、春も暮れゆくころでありました。渡しはに立つて、船頭を待つてをりますると、一人の雲水が之れも諸國行脚とみえて、周建と同じやうに、舟を求めて待つてをります。田舎はどこでも同じやうに吞氣なもの

で、船頭さんは、中々出さうともせぬ。其の頃は今のやうに煙草といふものゝなかつた時代でありますから、陽氣にうかれた類冠りの船頭でも、スパスパとやる譯には参らぬが、いかにも呑氣な船頭である。周建は旅僧といろいろ話してをると、旅僧のいふことには、

江州には華叟といふ大宗師がおじやるそうな。周建は

夫れは又難有いこと、衲は師匠を失ふて、大いに困難いたし、石山の觀音様へ冬は祈禱をいたしたが、またまた悟りが開けぬ。そういふえらいお方があるならば、すぐに尋ねてみませう。

と話しの中に、船頭は類冠りを直しながら、丁寧に御挨拶をいたし。

御僧様方には何れへ往かしめらるるか、と問ひかけました。そこで、周建の一休さんは、此の船頭こそよく知つてをるであらうと思ひましたので、

船頭さん、問いたいことがござる。江州に、華叟とやらん、えらい宗師がおざるそうな。何れのお寺におざらうか、知つては居ないか。

と話しかけますると、船頭は櫓を操りながら、それは又大して御殊勝なお尋ねでおざる。華叟さんは大した御出家じやと聞及びましておざる。堅田ぢや。

となり、朝にはみづりみを渡る櫓の音に心を澄し、夕には、暮れをつき出す三井寺の鐘の聲に耳を傾け、一意専心に、一大事因縁を究めました。が、時節の到来いたさぬためか、一向これはといふ悟りもひらけませんでした。

其の中に又年が立ちまして、周建は二十三才の春を迎へました。どういふわけか、未だ一大事因縁を了すことが出来ませぬ。勿論、大事といふことは、そなたやすく出来るものではありませんので、中々三年や五年や七年で悟りの開けぬのも無理はないのであります。然るにいつでも同じ食ふことが、修行の妨げとなります。都

路の大きいお寺なら、何十人何百人の雲水をもかくまふたけの用意が出来てをりますが、華叟さんの庵は小ささが上に、堅田といふ、片田舎のことでもありますから。中々托鉢も容易なことではありません。周建も之れには少からず弱りましたとみねまして、或る時はみやこへ出て、香包を作りて、夫れを賣り、やつと其の日を過したといふお話もあります。あの一休和尚が若い時に、香包をはつたといふことを考へますと、嘘のやうなお話してあります。

併し大事の前の小事、何の憚るところがありませんか。盗みするではなし、包を作りて賣ることに何の恥かしい

本來の面目坊が立姿

一目みるより戀どころなれ

一休さんは若い身そらで、本來の面目坊を戀ひするやうになりました。併し中々目的が届きません。面壁九年と
ころではないけれど、本來の面目坊をとつつかまへるこ
とはむつかしいのであります。

五月の二十日

眞の闇夜

一休さんは水海の上に舟を漕ぎ出しました。五月の闇と
いふやうに、まつくら闇みの湖上に、こぎ出でました。
見えるものは何、星ばかりであります。

一休さんは眞の闇夜に、どうするつもりか。琵琶湖の
上に木の葉のやうな舟を浮べて、ゆくゑも知らず、

ギイー

ギイー

とやつて居ります。併し本來の面目坊はみられません。夫
れでも、根機よく、

ギイー

ギイー

と漕いでをりますると、漕はゆらゆらと動いて、漆のや
うな空から、水の上をのぞきこんでをります。碧い星の
影はゆらゆらとゆれて、波は遠くへひろがつてまいりま

す。星は破顔して笑ふやうであります。

其の時！

其の時！

闇夜鴉が只一聲

かア

とないて過ぎました。

一休さんは覺はずハツと思ひましたが、櫓を抛け棄てました。十餘年來求めさがしてをりました悟りが開けました。鴉の一聲に悟りが聞けたのであります。みづりみの上を眺めますると、眞の闇。鴉はどこへいつたやら。眞の闇夜で、聲もなく。影もない。鴉もなく。カアもない。

闇の夜に鳴かぬ鴉の聲さけば

生まれぬささの親ぞ戀しき

一休さんは其の親にあひました。數十年來、京に、堅田に尋ね求めてをりました其の未生以前の親にあひました。

占メタツ

大事了畢しました。一休さんの心の中はどうでありますたでせうか。只歡び極まつて、涙が流れたことでありませう。

× × × × × × × × × ×

一休さんは早速艸菴へかへりました。そして、あくるをまちかねてをりました。一刻千秋の思ひで待つて居り

ますると、里の方が白みかゝつて、鶏が一聲鳴きました。華叟師は起き出でられたであらうかと思ふて、お部屋の方へ参りますると、起きて居られました。そこで、所解を呈しますると、華叟さんはからからと打笑ひ、

夫れは羅漢の境界じや作家の事ではない。

フンといはぬばかりの剣もほろゝの挨拶、鴉の聲をさいたたけあつて、一休さんも昨日までの一休さんではない。

何と仰せらるゝ。羅漢で澤山でおさる。

と力みますると、華叟さんはニコ／＼

作家じや、作家じやと。

と印可されました。

× × × × × × × ×

禪宗では悟つた時に。しるしとして、師匠から傳はつたものを傳へます。これに衣とか、鉢とか、證明する爲のかきものとかいふものがあります。華叟さんは一休和尚にかきものを附與されましたが、一休さんは見向もせず

左様なものは入りませぬ。

とツイと起つてしまひました。嗚呼「蛇は寸にして人を呑む」氣慨ありとは一休さんのことであります。

一休さんも傑い坊さんになられました。

第六回 南船北馬

上求菩提、下化衆生は僧家の本分であります。一休さんは二十年來、悟りの道を求めて、あちらこちらに流浪いたされましたが、琵琶湖上の鴉の一聲に悟りを開き、立派な大和尚になられました。

かやうにして、一休さんは、京都の町で、あちら、こちらに説法されましたが、其の無頓着なことは、中々筆にも、紙にも盡されたものではありません。ある時のこと、高い下駄をはき、腰に大きな朱鞘の太刀をさして、京洛中をのそりのそりとあるかれました。物見高い都の

ことでありますから、多くの子どもたちがより集まつてワイワイ騒ぎ廻る。夫れから魚賣りたの、飴うりたの、大原女たのといふありとあらゆる通りかゝりの人たちがとりかこんで、眼ひき、袖ひきする。一休さんは一向平氣でソコラあたりをブラブラと歩き廻る。

そこに、あるお侍が通りかゝりました。とみれば、何か大層な人たかりがして居りまするので、右のお侍は喚驚して何事であらうかと、たちよつてみますると、これは、例の名高い一休和尚が、大きな朱鞘の太刀を横へてノソノソやつて行きます。

一休さんといふ人は變りものたとは聞いて居たが、變

たなアと思ふてをりますると、一休さんは益得意になつて、長い朱鞘を遠慮もなくふり廻して参ります。件のお侍もこれは面白い、何ぞいはいがあるにそうるない。一休さんのことだから、きつと面白いことがあるわい。春の日永の眠氣さましにはちやどよい芝居じや。どれ一休さんにきいてみようといふので、お件につれてをりました足輕を走らせました。

足輕は主人のいひつけでありまするので、薄氣味わるくは思ひながら、恐る恐る一休さんのそば迄行つて、かしてまり。

もしもし、一休さん。あるじが御目通りいたしたいと

申してをりまする。

といへば、一休さんは、

何じやと。あるじが話がしたいといふのか。早くこいといへ。

と朱鞘をかまへて、立ち止まる。

たゞさへ、たかつて居つた、街の人たちは、お侍ひと一休和尚さんの問答があるといふので、あちらからも、こちらからも、寄つて来た、寄つて来た。實にまちにあふれるばかりの見物人が寄つて参りました。

件の侍は一休さんに忝しく一禮いたしまして、さて、申しまするには、

もしもし、一休さん、あなたは御出家の御身分で、太刀をおさしなさるとは、一たいどりのいふわけでおさるか。とつくと、承はられませい。

と申します、一休さんはニヤニヤと笑つて、

お大名には、近頃面白とおたづね。坊主とても人間のはしくれ。武士のさすものなら、坊主もさすわい。

と笑つて相手にせぬ。侍は、

其れは御尤ものお話しなれど、武士は人間のはしくれではおさるか、坊主のもの如意や拂子はもち申さぬ。

朱鞘は法器ではおさるまい。

一休さんは 馬鹿な侍の間拔といはぬばかりに、腰なる

朱鞘をスラリと引抜き、

いかにお大名。斯やうでござる、中には何もおざらぬカラのカラじや、お分りやつたかの、

と馬鹿にされる。侍はうかぬ顔をするど、一休さんは

アハハ、

と大笑ひして、

お大名。これみさしめ。此の朱鞘はそとこそ、赤く塗

りたて、立派にはおざれど、中は木剣の悲しさ、艸

一莖されるではおざらぬ。まして、人の首が切れやう

か、無用の長物とは此の事じやわい。

群集はワイワイとはやす。

堅田の華叟さんが腰の病ひで、大いに難儀をされましたが、一休さんはねんころに看病をなされました。又兄弟子の養叟といふ人が華叟さんの勘氣を蒙りました時でも大いに兄弟子の爲に、師匠に誤まつてお詫びをいたしてやるといふ具合に、けつして、恩を忘れ、好みを無みするやうなうつけものではなかつたのであります。随分と親切なよいお坊さんでありました、併し何しろ飄逸無類の坊さんで、天が下を我ものがはにぬたくりまわつた人であります。

實をいへば、父にと渡らせられる後小松の院様には、大層一休さんをひるきにして下さつて、たびたび宮中に

お招きになつて、禪宗のお話しに、其の日を送ることをお楽しみなされたといふことであります。かくて、三十五才の時に、堅田の華叟さんが亡くなされましたから、一休さんはいよいよ諸方へ流れてあるかれました。

四十五才のところ、花のみやこに立ちかへつて、銅駝坊の北の方に、小さい艸菴を結んで、日々洛中を托鉢してあるかれました。翌々年(永享十二年)のころ、如意菴にうつられました。一休さんの評判が高いので、毎日々々いろいろな人がうるさく訪ねてまゐります。一たいうるさいとは大きらひの一休さんのことでもありますから大いにあまして、讓羽山といふ山の中にかくれてしま

ひました。

持常住物置庵中
我無如是閑家具

木杓策籬掛壁東
紅海多年簞笠風

大隱は市にかくれ、小隱は山に隠る、一休さんはまちから山へゆかれましたが、松風の音。谷川の聲は一休さんるれしがらせたにはそうるありませぬが、一休さんはそんなケチくさい世すて人ではありません。うるさいことはさらひであるが、人間のくさみはさらひでない。草木は本来成佛の姿をあらはしてをるか、そんなものは煩惱がない。煩惱のないところには、悲しみもなければ、喜びもない。死んでをる。活きてをらぬ。一休さんは死んでをる艸木の中に埋れて了ふやうな世すて人ではない。西行法師とはちがふ。芭蕉翁とは少しわけがちがひます。そよふく風、通る香り、草の花も、未の花も、かつてに咲いて、かつてに散れば、夫れでよい、煩惱もなければ、菩提もない。石はころく、水はさらく。何の説法が入りませう。何の教化がいりませう。實のつて、落ちて、芽を吹いて、花が咲いて又實る。草ちや。木ちや、勝手にしやがれといふのが、一休さんの見識であります。成佛したものに用はないのであります。

一休さんは又山を出た、人間の香ひがよい、青くさい

山のにはひはいやたと、大きな如意を提きけて、みやこにかへりました。そして、都みやこをはなれた新まきむら村におちつきました。

之これを聞いた新まきむら村のお百姓せうたち、一休さんさんがやつて来た。一休きう和尚わじろうがむらにやつて来きさせたといふ評判ひやうはんで、大にほよろこび、早さつ速そく草さう菴あんを作つつてあげようといふので、ちいもはリアももつて擔にのふて、土つちを運はこぶやう、山やま鉦なだもつて、木きをきるやら、ガタン、ガタン、カチン、カチンで草さう菴あんを造つくりましたので、一休さんは知しらん顔かほして、此この草さう菴あんのあるじとなつて、新まきむら村のお百姓せうとなられました。酬しう恩たん菴あんといふのがこれでありふす。

炎ほのほがみえる。

火ひの手てがあがる。

つちけむりがみえる。

砂すなけむりが立つ。

呐なのこゑ。

蹄ひづめの音ね。

世よは應おう仁にんの大たい亂らんとなつて、吹ふく風かぜも血ちなまくさく、ふる雨あめも赤あかいいろを帯たびるといふ修しゆ羅らの菴あん。京きやう洛らく中ちゆうは上うへを下したへの大たい混こん雜ざん。けふはお寺てらがいくつ、あすはお宮みやがいくつ。公く郷けうさんのお邸やしきも、武ぶ將しやうの館やかたも、あした、夕ゆふべのけむりと立たちみつて、どこも、こゝも馬うまの蹄ひづめのあとばかりとい

ふえらひ戦争であります。山名方は山名方で陣屋をかまへ、細川方は細川方で陣屋を構へ、田舎からののはかり催された兵隊が毎日々々上つてくる。とても安閑として長い衣をきてうろついてをられる譯ではありません。公卿さんたちは縁故を求めて、諸國の大小名の領地に都落ちをする。五山の坊さんたちも、江州や、丹波や、和泉の末寺々々をたよつて、都を落ちるといふさわぎ。一休さんの薪村の草菴も、やがて馬の蹄にふみにじられて了ふといふさわぎになりましたので、一休さんは七十五の老人でありながら、杖をたよりて、大和、和泉、根津の國々にさまよふてあるかれました。

ある日一休さんは、春また浅きささらぎの空に、爐によりかゝつて居眠つてをられます。たれか柴の戸をほとほと叩くものがあります。たれかと思へば、廣徳寺の住持柔仲和尚といふ人でありました。柔仲和尚は一休さんは、大徳寺の住持となれといふ天子様の御命令を傳へました。そして、紫の衣をきてもよろしいといふお許しを傳へました。一休さんはたまつて承はつてをりましたが、筆をとつて、さらさらと一首の詩をかきつけました。読んで見ると、

大燈門弟滅殘燈
五十年來叢笠客

難解吟懷一夜氷
愧慚今日紫衣僧

ときくと、一休さんは
南じや

といはれる。驚いて、

一休さん。夫れは何かの間違ひでござりませう。阿彌陀様は昔から極樂にお在でなされるに極つてをる。そして極樂は西にあるに極つてをる。南とは何んじや。一休さんは矢ッ張つむじ曲りじや。西といへは面白くないから、わざと南といはる。極樂が南に引越したのかしらん
一休さん。ほんとうに阿彌陀さんは南にお在なさりまするか？

ときと直すと、一休さんは、大きな聲で、

ソウじや。みな身にあるのじや。馬鹿奴！と大喝一聲。

夫れでは、極樂が宿替でもしましたのかと、きくと一休さんはクドク奴じやといはぬばかりに向き直つて、

ある人、達磨大師に問ふ。地獄とは何れのところぞや。答へて曰く。汝が心中に、貪瞋癡の三毒是れなり。貪瞋癡とは、貪欲とはよろづの愛念執着の欲を申すなり。瞋とははらをたつる念を申す也。痴とは愚痴とて何事心のままになき事をかなしみ、我れと我が心をなやます事を申すなり。此の三毒かくの如く、善惡の報を造

り出し、地獄に落つるなり。地獄とて、別に餘の世界あることにてはあらず。又問ふ。極樂とはいづれのところぞや。こたへて曰く。極樂淨土とて、ほかにある可からず。汝が心中の三毒をはらふ所、即ち淨土なりと答へ給ふ。

と説いてきかせられます。極樂が宿がへしたのでもなれば、地獄が引越したたのでもない。みんな心の中にあるのじや。夫れを知らぬから、地獄じや。極樂じやと、探し廻りてをる。阿彌陀様は皆身にあるのじやぞ。分つたといつて呵々大笑。

一休さん、何ぞ面白いお話しが承りたうござりまする
といへば、一休さんは上機嫌で、

何じや。

うるさい奴じや。

花が散つてをるのに、遊ばつしやれ。

と叱りつける。

夫れでもお話しが聞きたうござりまする

と曰へば、

軍さの話はどうじや

と曰はれる。

御承知の通り、其の頃は、さむらひの世の中でありま

するから、けふもいくさ。あすもたゝかひといふありさまで、朝から晩まで、矢叫びの聲のたえたことはないといふ時代。殊に應仁の大亂と申して、細川勝元と山名宗全といふ人が東と西に分れて、京都の街はいくさばかりあつた時代であります。當時の侍は寄ると、さわるといくさの話で持ち切つて居た時代、従つて、町人も百姓も武張つたことが好きといふ有様でありますから、一休さんがいくさのお話をして下さるといふので、大喜びであります。

細川方と山名方のお話でござりまするかといふ。一休さんは又とはいはぬばかりに、

ハハ、

も少し面白いわい。

夫れでもどんなお話してあらうと好奇心に驅られて、町人や百姓、お侍迄、和尚さんを取りまく。

鬼のいくさじや。

一休さんは如意を拂ふり廻す。

面白うをざらう

一段と面白うをざらう。

話さしめ。

いざ語らしめ。

と子どもまでが寄つて来る。

極樂に戦争が始まつた。我も我もと具足を着てやつてくる面々は、九品蓮臺の大名達じや。等覺山の觀音左衛門。蓮花野の勢至太郎。横笛の樂王兵衛。笙笛の樂上武者、懺悔の里の普賢殿。琴上手の自在五郎。三賢寺の師子吼十郎。同陀羅尼三郎。能滿福智の虚空藏冠者。歡喜地の德藏庄子。法藏別當。金剛藏太夫。光明太郎。珠寶平内。指箭の惠太刀の華藏主。大箭の月光王小箭の日照王。逸り尾の定自在。一番かくる三味王といふやうな菩薩方が雲のやうな軍勢を卒る。或は紫の雲に乗り、或は蓮の花に乗り、生死の大海に十萬餘艘の弘誓の船を浮べて出陣なさる極樂の東門から出ら

れる。御大將の阿彌陀様は青黄赤白の錦の鎧直垂に、相好莊嚴の小手を指し、大慈大悲の御胄に、三身即一の金物打て、八萬四千の白星の胄に、四十八願さしたるやなぐひに、僧祇切へたる功德の滋藤の古弓、妙觀察智の幡さして、青蓮のまなじりを一度めぐらせば、光明遍照十方世界と輝きわたる。勇士の面々勇み立ちて出陣する。

東の方からは、藥師如來が寄せ給ふ。日光、月光の二菩薩を始めとして、前後を圍む十二神將。藥師經の日記に任せ、眞言儀軌を守つて攻め寄せよとあつて、謀りことは中々すきがない。十二神將は重代の武者で、

何れも、一騎當千の兵ときをつくりて、辰の時の大將は龍かしらをかぶとに戴き、己の時の大將は己のかしらを甲にし、次第々々に時を守りて進軍せよとの命令である。其の外の佛菩薩は佛智藥といふ藥を身に塗りて、甲冑を着ず、瑠璃光の光で、敵の矢も通らぬやうにし、五色の旗を差し、大圓鏡智の楯をもち、眷屬共は、八日の夜に、四十九の燈火を手に手にともし、罪業の衆生を悉く囚にして、我淨土に引取り、生命長からしめようといふので、十二の大願を、起される。

北の方からは、釋迦如來が大將となつて、攻め寄せて來られる。靈山淨土を打出で、三世の聖賢、菩薩など

を卒ひ、副將軍文珠菩薩、獅子に跨つて、清涼山から出陣される。五百の大願を起して、あらゆる衆生を地獄から引きとりたいといふ勢ひである。普賢大王は白象に跨つて、二聖、二天、十羅刹などいふ部下を卒ひて出陣される。都率天からは、彌勒菩薩が多くの天衆を引つれる。總大將の釋迦如來は既に第六天の魔王を打ち従へて、地獄のそばまで攻め寄せられる。すると法華八軸の一々の文字が忽ち勇士となつて、地獄の門を打破らんと攻めかけた。

南の方からは、寶生如來といふ佛がけらいもなく、武器もなく、只一人出陣される。併し徳ある人でありま

して、如意寶珠といふ玉を、平等性智のはこに入れてもつてをられるので、此の寶をつぶてるやうに、なげかけられると、地獄の鬼共は皆怖れて逃げ出す。此の珠が勇士と化して、攻め寄せるので、地獄の鬼共はかへつて、南の方を恐れてをる。

さア愈戦争が始まつた。四方から時の聲をあけて攻め寄せます。地獄の鬼は、佛は正直なものかと思へば、衆生はしさに攻め寄する慾のふかさ加減が分らぬ。といつて、一人の鬼は淨波璃の鏡を楯にとり、十五束の矢を勢ひ込んで放ちますると、西方淨土の副將軍觀音左衛門が忍辱の鎧の袖に當つて、ハツシとばかりはね

返る。そして、十萬億土を過ぎて、極樂の東門の板に立つ。弱いなりたての菩薩等は此勢ひにヒロヒロする。夫れから、六觀音が大将で、二十八部衆、各五百の眷屬を引つれ、大定智慧の弓に、弘誓深如海の矢をさして、八大地獄を一々に射通される。此の時、東の方からは日光、月光の二菩薩を先頭として、十二神將の面々が一二の木戸を打破つて、三途の河のはとりまで、攻め寄せました。鬼共は北の方に多くの劍を立て、鐵の湯を湧かして、瀧水のやうに流しかけた、普賢菩薩は平等一味の雨を降らして攻めかゝられた。七日七夜合戦があつたけれど、一向に勝負がみえなかつた。

大日如來は之れを見て、密嚴淨土から、金剛界の七百餘尊、胎藏界の五百餘尊を繰り出し、皆悉く地獄を占領し、衆生を救ひ、鬼共を俘にして了ひ、地獄の上に大日如來の都を建て、八葉蓮華の形に作り、都は中臺に定まり、東に藥師、西に彌陀、南に寶生、北に釋迦が構へ、四角をば、普賢、文珠、觀音、彌勒領し玉ひ、全く佛國となして了まはれた。

何と面白い合戦でおざらうか。

といはれますると、何れも口を揃へ、感服いたしました。

面白うおぎつた。

面白うおぎつた。

第八回 風流三昧

有漏路から無漏路にかへる一休み

風吹かは吹け雨降らは降れ

と歌つて、一休と號した位の人でありますから、決して、朝から晩まで、閻魔様のやうなしかめた顔をしてゐた人ではありません、夫れは前のお話してよく分りてゐることで今更申上げぬでもよいことでもあります。此の歌の意味を一寸申述べますと、有漏といふのは、煩惱のあるといふこと。無漏といふのは、煩惱のないといふこ

と。そこで、有漏路といふのは、煩惱のあるところ、即ち迷ひの世界のこと。無漏路といふのは、煩惱のない悟りの境界で、涅槃、浄土のことでもあります。迷ひの世界から悟りの世界にかへりてゆく、一休が此の世の中であるから、風が吹かふとも、雨が降らふとも、少しも關はない吹きたければ吹くがよし、降りたければ降るがよしと悟つた歌であります。

一休さんは歌も上手、詩も上手でありまして、中々立派な歌が澤山ありますし、詩も澤山にあります。歌は後にお話し申しまするが、詩は「狂雲集」「續狂雲集」といふ二巻の詩集がありまして、中々立派なものであります。

凡そ足利將軍の時代、とりわけて義満公の時代は文學が盛んでありまして、禪宗の坊さんは何れも詩が上手であります。義堂和尚や、絶海和尚などいふ人は、詩が大層上手で、支那人も舌を巻いて賞めたといふ位であります。一休さんも、大詩人でありまして、元々が洒々落落々として、事に煩はされぬといふえらいお方でありまして、上には文才があると來てをるのでありますから、其の出來榮は中々であります。詩ばかりではありません、其の頃流行いたしてをります謠曲といつて、うたひであります。其のうたひを一休さんが作つておられるのであります。其の謠が又中々よく出來てをりまして、とて

も、並々の文章家の及ぶところではありません。禪宗の奥深いおさどりの始末を一句一句に含ませて作つてありますので、實に傑作であります。これでも、一休さんは文學者として、此の世に傳はるだけのねうちのあつた人でもあります。其の謠ひは二曲だけ残つてをりまするが、其の題は「山姥」と「江口」といふのであります。「山姥」は都の遊女が信濃の善光寺様へお参りをする途中の山中で山姥か山めぐりをするとところを作つたもので、「江口」は江口の遊女が西行法師と歌の問答をするとところを作つたもので、何れも實に立派な作であります。今「山姥」のあらましをお話し申しませう。山姥といふのは山に住む

鬼女のことでもあります。

「善き光そと影たのむ。佛の御寺尋ねん」と善光寺へ参ります。之れは山姥の第一句であります。「都を出で、さゝ波や、志賀の浦船漕かれ行く。末は有乳の山越えて、袖に露ちる玉江の橋、かけて末ある越路の旅、思ひやるこそ遙かなれ。梢波立つ汐越の、安宅の松の夕煙」と、段々京都をあとにいたしましたして、北國の方へ参ります、愈々北國になりますと、峻しい路となりますが「消えぬ憂き身の罪を切る。彌陀の劍の砥並山、雲路うながす三越路の、國の末なる里問へば、いとど都は遠ざかる、境川にもつきにけり」とありまして、越中越後の國界ひに

流れてをりまする境川に着いたのであります。

夫れから、段々と路のはどりのけしきでもながめながら参りませうといふので、あける山の方を心がけて、ゆきます。元よりお寺へ参る修業に出た路のことでありますから、乗物などには乗らず、徒歩で参らうと、右の遊女とお伴の人と相談してをりますると、未だ日は高い筈であるのに、俄に一天かき曇つて、とつぷり暮合ひの空となりました。

そこに、山姥があらはれて申しまするには、こゝはあけろの山と申して、人里遠いところである。きけばあなた(遊女に向ひ)は百魔山姥といふ名前もあつて、山姥の

山回りする有様を曲舞の歌に作つて、大層評判を取つてをるお方であるさうな、どうかそれを今宵歌つてきかせて下さるるか。私は本統の山姥であるけれど、あなた(山姥)の歌がきゝたうてならぬ。夫れを聞きたいばかりに、わざわざ日を暮れさせて、私の庵にお泊め申さうとするのである。どうか、さかせ下さるやうと、恐ろしい山姥があらはれて参りました。「扱は誠の山姥の是まで来り給へるか、二人は大いに驚く、其の時山姥は今宵歌ふて下さるならば、其の時眞の我姿を現はして、舞ひを致さうと語りつゝ、かきけすやうに消えてしまひました。夜は森々とふけて参ります。其の物凄いとは何にたと

へんやうもありません。「あら物すこの深谷やな。寒林に骨をうつ靈鬼、泣くく前生の業を恨む」とありまして、山姥がそろそろあらはれて参ります。其の姿の恐ろしいことは一目見たばかりで、ふるひ上る程であります。姿詞は人間でありますが、「髪にはおどろの雪を戴さ、眼の光は星の如し」とありまして、顔の色は真紅な鬼瓦其の儘の姿で、鬼一口に食はんとする勢ひであります。二人は恐ろしくてたまりませぬけれど、致しかたもないので、遊女は聲もはがらかに、山姥の歌を歌ひ出しました。

夫れ山といつは 塵泥より起つて、天雲かゝる千丈の

峯。海は苔の露よりしたよりて、波濤を疊む萬水たり一洞空しき谷の聲、梢に響く山彦の、無聲音をきくたよりとなり、聲にひゞかぬ谷もかなと、望みしもけにかくやらん。ことに我住む山家の氣色、山高りして海近く。谷深うして水遠し。前には海水滾々として、月真如の光をかゝけ、後には嶺松巍々として、風常樂の夢を破る。刑鞭蒲朽ちて螢むなく去る。諫鼓苔深うして鳥驚かずともいひつべし……………

と歌ふ聲は、谷に響いて其の物凄さ。假に自性を變化して、一念化生の鬼女となつて、目前に來れども、邪正一如と見る時は、色卽是空そのまゝ

に佛法あれば、世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳は緑花は紅のいろく

聲は恐ろしさに、慄えながらも絲のやりにつゞく。山姥はうつとりとききとれてをる、聲は次へとつゞく。たえまには、恐ろしい谷川の音。

さて人間に遊ぶこと。ある時は山賤の、樵路に通ふ花の陰。やすむ重荷に、肩を借し、月もろともに山を出で里まで送る折もあり。又ある時は織姫の、五百機立つる窓に入つて、枝の鶯糸くり、紡績の宿に身を置き、人を助くるわざをのみ、賤の目にもみえぬ鬼とや人の

云ふらん

と調子は急になりつ、緩かになりつ、松風の音につれて、歌は次から次へとうつりゆく、木の間にはキラ／＼する青き星の光が……

世を空蟬の唐衣。拂はぬ袖に置く霜は、夜寒の月に埋もれ、打ちすさむ人の絶間にも、千聲萬聲の、砧の聲のしでうつは、たゞ山姥がわざなれや。……

と歌ひ了る。

山姥は喜んで「山又山に山めぐりして」どこへ往つたか分らぬやうになつてしまひました。之れで、一休さんの謠ひ作りとして、えらいことが分り

ましたであらうと思ひます。其の文句のうるはしいこと、又ものすこいこと、全く鬼女があらはれてくるやうに作つてあります。山姥といふ鬼女は妄執に依つて輪廻してをりまするが、元と元と邪正一如、迷悟無二であることを知らぬから迷ふて、鬼女となつて山めぐりの苦しみをうけてをる姿を謠ひに作つて、柳の緑、花の紅、皆本來迷ひはなひ、皆其の儘の佛たることを示された名文であります。一休さんの遊戯三昧はたゞの遊戯ではありません、全く謠ひを借りて、教へを説いてをられるのであります。狂言綺語のことわりで佛法を讚嘆する手たてであります。一休さんの三面六臂の働きは、誠にえらひものであります。

であります。

第九回 歌問答

一休さん歌が聞きたうおざります。

といへば、一休さんは、雪のやうな眉毛を動かして、微笑みながら、

何と一休の歌がきゝたうおざるか、

とシロリと一瞥される。

いかにもさやうでおざる。身共は無學でおざるに依つて、佛の心を歌ふた歌をさかせられい、心得草にいたしたうおざる。

と若いお侍わかき さむらい

何事も夢幻なにごと ゆめまほとさとりては

うつゝなき世よのすまるなりけり

と一休いっけさんは一首しゆを詠よまれた。

何なんといふわけでおざらう。

されば、世上せじやうの事は、何事なにごとも夢幻むげん沫泡まつぼうと悟さとりては、皆みな以もつて、あとかたもなき世よの有様ありさま、空々くうくう寂々じやくじやく。水みづは流ながれて沈々ちんちん。風かぜは吹ふいて颯々さつさつぢや。

これはいかにも面白おもしろうおざる。

今いま一つ聞きかしめられい。

心得こころえでおざる。

これは如何いかでおざる

と一休いっけさんは筆ふでとりあけて、短冊たんざくにスラスラと一首しゆ。侍さむらいは忝うやうやしく押し戴いたいて、

朝露あさつゆは消きえ残りのこりてもありぬべし

たれかこの世よに残のこりはつべき

いかにも仰たはせられまする通り、露つゆは消きえむも、人ひとは残のこらぬとな。いかにも、うまくでかいておざる。

も一つ所望しよぼういたさう。

何なんと今いま一つとな。さてさて欲よくの深ふかいお侍さむらいぢや。さればかうもおざらうか。

雨あめあられ雪ゆきや氷こほりとへたつれど

落つれば同じ谷川の水

宵の嵐に、梅も散ります。さくらも散ります。桃の花も散ります。李の花も、梨の花も。桃櫻梅李皆落花。紛たり。續たり。いかにも面白うおざる。

× × × × × × × × × ×

侍のかへりましたあとに、隠居らしい茶人みたような翁がまゐりました。鶴のやうな白い髪を垂れて、まるで、仙人のやうであります。忝しく一禮いたし。

大和尚には、御機嫌うるはしう渡られますか。けふは殊によいお天氣でおざる。詩ばかり作つて居させまするか。

之はよく参られました。詩ではおざらぬ。歌をうたふて

若侍奴にきかしてやつたところでおざる。

夫れはいかにも一段と興あることでおざる。何ぞ珍らしい歌が出来ておざりまするか。

それはいくらも出来ておざる。吹く息。吐く息。みんな歌じや。柳の枝の鶯。田にすむ蛙。いづれか歌をよまざりけると申しておざる。

承はりたうおざる。聴かせられい。

醉狂な。狂言綺語も讚佛乗のことわりとやら。閑葛藤を打しませうか。

と一休さんは、ニコく

ちと澁いところはかうもあらうか。

心とはいかなるものをいふやらん

墨繪に書きしまつかせの音

いかにも澁りをさる。今少し澁さが足らぬけにおさる。

澁味三斗が欲しらおさる。

夫れではどうじや。

佛法は鍋のさかやき石の髭

繪にかく竹のともすれの聲

これは一段と澁りをさる今少し何か出させられい。

なしといへばなしとや人の迷ふらん

こたへも云する山彦の聲

夫れでは山彦の聲がきこえませぬ

ありといへばありとや人の思ふらん

こたへてもなき山彦の聲

いかにもよう聞こえておさる。有無の二邊を離れて、

さて後はいかに。

有無をのる生死の海のあま小船

底ぬけて後有無もたまらず

× × × × × × × × × ×

此の時、小僧さんが、一休さんの前に忝しく、両手をつ

かへて

申しあげます。蜷川殿がみえてをざります。

蜷川になかははすかさず

年越としこしは冥土めいどの旅たびの間屋場まひやばか

月日つきひの飛脚足ひきやくあしをとどめず

一休きゅうさん

光陰くわういんは矢走やはせを渡わたる船ふねよりも

早はやいと知しらば末すえを三井寺みいでら

蜷川になかは

分限ぶんげんにあはづにせゞつがを使つかふなよ

心堅固こころかたにしまつからささ

一休きゅうさん

金銀きんぎんは慈悲じひと情なさけと義理ぎりと耻はぢ

身みの一代だいにつかふ爲ためめなり

蜷川になかは

世よの中なかは貧者ひんしや有徳者うとくしや苦者くしや樂者らくしや

なん者なんじやかじやとて末すえはむちやくちや

一休きゅうさん

今日けふはめで明日あすわるくいふ人ひとの口くち

泣なくも笑わらふもうその世よの中なか

蜷川になかは

世よの中なかは乗合船のりあひぶねのかりずまひ

よしあし共ともに名所めいしよ舊蹟きうせき

同たなじく

一休さん

一休もやぶれ衣ころもで出るときは

乞食坊主こじきぼうずと人ひとはいふらん

袈裟衣けさぎありがたさうにみゆれども

これも俗家ぞくけの他力たうりき本ほんぐわん

蜷川になかは

衣ころもよりけさより俗ぞくのふるじゆはん

おのが伎倆ぎりやうできるぞたふとき

一休さん

振袖ふりそでも留袖とめそでもこそかはれども

はたかにすれば同じ姿すがたよ

蜷川になかは

骨ほねかくす皮かはには誰たれも迷まよひけん

美人びじんといふも皮かわのわざなり

一休さん

皮かはにこそ男おとこをんなのへたてあり

骨ほねにはかはる人ひとかたもなし

蜷川になかは

何事なにごとも皆偽みないつはりの世よなりけり

死ぬるといふもまことならねば

一休さん

生うまれては死しぬるなりけりおしなべて

蜷川になかは

釋迦も達摩も猫も杓子も

さとりなば坊主になるな魚を食へ

地獄へいつて鬼にまけるな

一休さん

鬼といふ恐ろし者はどこにある

邪見の人の胸にすむなり

蜷川になかは

極樂や地獄があるとたまされて

喜ぶ人におちるひとく

一休さん

此の世にて慈悲も惡事もせぬ人は

さぞや閻魔も困り給はん

蜷川になかは

ちごくとは何を岩間のこけな奴

いろと欲とで身を破る人

一休さん

死んでから佛といふも何故ぞ

こゝともいはず邪魔にならねば

蜷川になかは

死んでから佛になるはいらぬもの

いきたるうちによき人になれ

蜷川になかは

一休さん

ひとり来てひとり返るも迷ひなり

きたらず去らぬ道ををしへん

蜷川になかは

一休さん

引導は無事なる時に受け玉へ

末期の旅に赴かぬうち

つみかさなりてあると思へば

ひとり来て獨りでかへる道なるに

みちをしへんといふぞをかしき

蜷川になかは

一休さん

追善にあふた佛が盆棚へ

としとく来れば浮ぶ瀬はなし

佛とは何たらほうし柿のたね

下駄も佛も同じ木のはし

一休さん

佛にもなり固るはいらぬもの

石佛らをみるにつけても

蜷川になかは

迷ふなよ五輪の石の墓じるし

一休さん

妻や子が側でなけぐもきゝ入れず
死んでゆく身に何の引導

極樂は十萬億土はるかなり

とてもゆかれぬわらじ一足

蜷川

歳々に悪魔外道の流さるゝ

その西方にゆきたくもなし

一休さん

きのふ過去けふの現世にあす未來

おきての神に寝ての身佛

蜷川

一代の守本尊をたづぬるに

われ人共に飯と汁なり

一休さん

世の中は食ふてかせいでねて起て

さてそのあとは死るばかりぞ

同

肉もなくよくしやれかうべ穴賢

めでたくかしく夫れよりはなし

蜷川

うき世をば何の絲瓜と思ふなよ

第十回 霜くずれ

一休さんは真宗中興の祖、蓮如上人とは大の仲好しであつた。

蓮如上人は申すまでもなく、本願寺八代目の法主で、山科に居られたのであります。一休さんとは宗旨こそ違へ常に往來して、交際してをられたのであります。

寛正二年の十一月の報恩講はちやうど、宗祖親鸞上人の二百回忌の正當でありました。そこで、本願寺では、二百回忌の大遠忌が勤まるのであります。

何しろ、親鸞上人の五十年目に一度しかない御遠忌の

ことではあり、今迄は本願寺とはいへ、誠に微々たるもので、決して、今日の本願寺のやうな立派なものではありません。蓮如上人が出て、始めて中興をなさる位でありますから、其の微祿なことゝいつたら、お話になりませんのであります。

蓮如上人 かやうな小さい真宗を引起して、立派な真宗として下さつたので、上人の御盡力といふものは、中々一通りではありません。若い時、御勉強なさるにも、燈火の油を購ふ用脚がなかつたといふ位であります。併し上人は非凡なお方でありますから、北越の方を御巡化なされて、布教に熱心されましたので、今迄は火の消

えたやうになつてをりました本願寺が、ハツと火の手をあけたやうに、あちらにも、こちらにも、別院が建立されるといふ有様になつてまゐりました

かやうに、春にあふて、さくらの花が一時に咲くやうに盛んになつた本願寺が、親鸞上人の二百回忌を営まれるにいふにつけて、同行たちはあちらからも、こちらからも、米を負ひ、たきぎを擔ふといふ具合で、集まつて参りました。そこで、此の御遠忌の賑かさといふものは今迄にたぐののない程であります

かねて仲よしの一休さんへも、蓮如上人の方から、御案内がありましたのであります

其の頃御案内をうけられました公卿さんがたは、いづれも得意なうたをよんで、蓮如上人に贈り、祖師の高徳を讃嘆せられました

一休さんは、多くの公卿さんたちが、いづれもいづれも、立派な歌を詠んで、蓮如上人に贈られたといふことを聞かれましたので、夫れでは、自分も一首の歌をよんで、御祝ひにいたさうと考へられたまはして、さつそく、色紙を取出だし、しばし思案してをられましたたが、やがて筆をとりあけて、サラサラと見事に一首の歌を書かれました

一休さんは本願寺に参られて、佛前に禮拜をいたされ

さて、蓮如上人に御面會がありましたして、このたびの御法要のうるはしう勤まりましたおよろこびを申し上げられ件の色紙を差しいたされました

蓮如上人は大層お喜びなされ、それはいかにも忝けなう存じますると、件の色紙をお開きなされまするといふと、墨の匂ひの美事に、

末世相應の心を

と詞書がありましたして、さて次に、

襟巻のあたゝかさうな黒坊主

こいつが法は天下一なり

とかいてありました 蓮如上人はニツユとして、押し

いたたかれました

其の時、一休さんは、蓮如上人に打向ひ、親鸞上人のお像を頂戴いたしたいものでありますると、御懇望がありましたので、蓮如上人は外ならぬ一休さんの御たのみでありますから、念に念を入れて立派なものを贈らふといふおかんがへで、其のころ世に聞えてをりました畫工の芝の法眼慶舜といふ人に命じて、祖師のお像を畫かせられ、御自筆で題名を加へさせられて、一休さんへ贈られました

一休さんは、大層喜ばれまして、此の畫の上に讚をかれました、其の讚は前の一首であります

いろいろじや、いろいろじや、

といはれました、一休さんは、大層喜んで、

柳は緑、花は紅のいろく

とつづけて、あの名高い山姥の曲を完成されたといふこと
とであります

× × × × × × × × × ×

又ある時のこと、蓮如上人と、一休さんとおふたりが

出會の席に、ある人が参りまして、馬の圖を出して、お

二人に賛をばかき下さるやうに、お願ひ申しました

其の時、一休さんは

よし来た

といひさま、筆をとつて、墨黒々と、

馬じやけな

と大きくかかれました、

すると今度は、蓮如上人が又筆をとられまして、一休さ

んのかかれました讚のわきに、又も墨黒々と、

さやうじやけな

と讚をかかれたといふので、其の頃は専らの評判であつ
たといふことであります、一休さんと蓮如上人はかやう
に親しく交際をなされたのは、誠に面白いことではあり
ませんか、

あることのために、還俗げんぞくしまして、二十五歳まいご頃から、一休きゅうさんの下に居士こしとなつて、禪ぜんの工夫くふうをいたしました。夫それから、三十歳さんじのころ、大徳寺だいとくじの塔頭たつとうの眞珠庵しんじゆあんといふところにすまるをいたしましたして、工夫くふうをいたしてをりましたところが、眠ねむくて仕方しかたがないので、ある醫者いしやにたづねましたところが、お茶ちやがよいといふので、お茶ちやを柎尾こがのをから取りよせて、大たいに賞翫しやうかんし、其その法式ほふしきを定められたのであります。

ある時とき、珠光じゆくわうが参まゐりましたので、一休きゅうさんは

趙州せうしゅうの喫茶きつちや如何いか

と問とはれました。ところが、珠光じゆくわうは一言いごんの答こたへもせず。

たまつてをりましたので、一休きゅうさんは侍童たごうにいひつけて、お茶ちやを立てさせて、珠光じゆくわうの前に出ださせました。

そこで、珠光じゆくわうは辱かたじけないと茶碗ちやわんをうけて、一口くちの呑のもうといたしますると、一休きゅうさんは、忽たちまち

喝かつ

と大喝だいかつ一聲せいして、もつて居をられました鐵てつの如意にょいを拂はらつて

珠光じゆくわうのさゞけてをる茶碗ちやわんを、ちやくちやに打碎うちくしました。

珠光じゆくわうもさるもの、少すこしも動うごかず、やゝ暫しばらくしましてから、難有ちゆうがたり存ぞんじまする

と挨拶あいさつをいたしました。其その時とき、一休きゅうさんは

喫茶きつちや旨無むの時ときいかん

と問はれますると、珠光は黙つて立つて、玄關の方にゆきまする時に、一休さんは又一問をあびせかけました。

茶を喫して去る時如何

珠光は始めてにつこりして、
柳緑花紅の眞面目

と答へたといふことであります。

× × × × × × × × × ×

春風秋雨八十八年。うき世を三分五厘にみくびつて、

面白うおかしう茶かしてしまつた一休さんも 寄るとし

波には敵しかねて、山城は新村の酬恩庵にかくれて。を

られましたが、文明十三年の霜月の二十一日に、娑婆の

縁盡きて、閻魔さんの許に旅立たれました。其の時、座について一喝を殘されました。

須彌山畔 誰會我禪 虚堂來也 不直半錢

× × × × × × × × × ×

面白い一休さん。おかし一休さん。すねもの一休

さん。茶かし坊主の一休さん。氣違ひか。大宗師か。サ

ツパリ分らぬ一休さんは無漏路にかへつて 灰となつて

しまひました。今はいつこにござるでありますか。

新村に酬恩庵を訪ねれば、折も浅い春の風に、ふきの

臺を長くもえてをつて、一休さんの木像の眉が白う光つ

告豫書刊近

編五第

滑稽
奇談

一休の頓智

一休和尚の續
編とも云べき
者滑稽奇談頓
智の短編一百
餘項寸珍美本

兌發館文法

佛敎
説話

月小夜

小夜の中山靈
鐘の由來
近日發行

著生先城徳屋大

一休和尚 終

てをります。

世のうさにかへてすみぬる柴の戸を

問はしかはなる人もうらめし

大正二年十月十日 印刷
大正二年十月十五日 發行

正價金貳拾五錢

著者

大屋徳城

發行者

澤田友五郎

印刷者

村田利吉

印刷所

村田文泉閣

發行所

京都市五條通高倉東入
振替大阪四五五六番

法

文

館

電話下二一九〇番

不許複製

大正新時代の著新

佛教說話叢書

佛教說話叢書生る說話は傳説なり、物語なり、小説なり、然も傳説は國民性の發現にして、**宗教的傳説は國民信仰の結晶也**未來の小國民は今尙桃太郎勝々山のお伽噺に**大和魂**を養成せられれば**佛教徒の家庭**には一**說話叢書**す弊館は茲に**日本佛教史の專攻者**たる先生に請ひ其を發するの光榮を得たり**著者は該博なる學識を平易明麗**の筆に寄せ婦女**說話體**を以て**一般家庭は勿論**日曜學校の教案布日曜學校の教案布論**教育家の參考として**清新無比の**伴侶**たり**新時代の布教育家諸君父兄諸君**乞ふ一本を購ひて**知り給へ**

發行所 京都市五條通高倉東入 法文館 振替大阪四五五六番

佛 教 說 話 叢 書

大 屋 德 城 先 生 著

第 一 編

佛 教 說 話

中 將 姬

四 六 版
全 一 冊
頗 美 本

正 價 金 廿 五 錢
郵 稅 金 四 錢

目 次

| | |
|-----|------|
| 第一回 | 二葉の句 |
| 第二回 | 後苑の夢 |
| 第三回 | 雲の別れ |
| 第四回 | 藤苑の宴 |
| 第五回 | 嫉みの刃 |
| 第六回 | 毒酒薬酒 |
| 第七回 | 配所の月 |
| 第八回 | 當麻の里 |
| 第九回 | 妙なる校 |
| 第十回 | 紫雲來迎 |

佛教説話第一編として佛教史談に委しい大屋徳城師の書かれたるものさすは讀んで趣味あり面白い、宗教的童話の成功したものである、中将姫の貴き家に生れてから、雲雀山に難義をせられし後に當麻の寺で彌陀佛力の御不思議を信下、尊い往生を遂げられたと云ふ、殊に面白くも有りがたい因縁である、そして此の十回のお話になる様によい見出しが附けてあつて美しく書かれてあるからすらくと讀み通すことが出来る、夜長の冬信仰の家庭に好讀み物たるのみならず、少年會などにとつてもよい材料の者である。

(貫練批評)

發 行 所 京 都 市 高 通 五 條 東 八 條 法 文 館 振 替 四 五 大 阪 六

佛 教 說 話 叢 書

大 屋 德 城 先 生 著

第 二 編

佛 教 說 話

熊 谷 直 實

四 六 版
全 一 冊
頗 美 本

正 價 金 廿 五 錢
郵 稅 金 四 錢

目 次

| | |
|-----|------|
| 第一回 | 剛の者 |
| 第二回 | 弓矢丸 |
| 第三回 | 初あらし |
| 第四回 | 雁の行衛 |
| 第五回 | 壽永の秋 |
| 第六回 | 一二の驅 |
| 第七回 | 青葉の笛 |
| 第八回 | 宿縁開發 |
| 第九回 | 信行兩座 |
| 第十回 | 粟生の里 |

極樂にも、剛の者とやまたすらん
西に向ひてうしろ見せねは
一ノ谷の勇士熊谷直實の一代を趣味深く平明にかきしもの日本一の剛の者、極樂往生の大先達の面目は躍如として紙上に現る、家庭の讀本としては勿論布教家の資料として尤も適當たらん

發 行 所 京 都 市 高 通 五 條 東 八 條 法 文 館 振 替 四 五 大 阪 六

佛 教 說 話 叢 書

大 屋 德 城 先 生 著

第三編

佛 教 說 話 松 虫 鈴 虫

四六版
全一冊
頗美本

正 價 金 廿 五 錢
郵 稅 金 四 錢

| |
|----------|
| 目次 |
| 第一回 殉教の血 |
| 第二回 鹿ヶ谷 |
| 第三回 念佛興行 |
| 第四回 吉水の里 |
| 第五回 花のかげ |
| 第六回 二つの髻 |
| 第七回 御苑の秋 |
| 第八回 くらかみ |
| 第九回 南北鬱訴 |
| 第十回 河原の露 |

宗教的傳説は國民信仰の結晶なり、清新なる傳記布教の教材は本書にあり。教界に悲劇多き中にも七百年前念佛の一門興行に際し官女松虫鈴虫が發心の物語程悲痛壯烈なる者なし。

本書は此の慘憺たる悲劇「住蓮安樂の出家」松虫鈴虫の發心「兩上人流罪」等を著者得意の麗筆を以て更に彩色せしもの書中痛切なる無常觀熱烈なる求道心に感じ其の金剛不壞の信念に擊れては讀む者をして潜然涙に袖を濡わしむるの概あり

發 行 所 京 都 高 倉 市 五 條 入 法 文 館 振 替 五 五 大 阪 六

佛 教 說 話 叢 書

大 屋 德 城 先 生 著

第四編

佛 教 說 話 一 休 和 尚

四六版
頗美本
全一冊

正 價 金 廿 五 錢
郵 稅 金 四 錢

| |
|----------|
| 目次 |
| 第一回 一休さん |
| 第二回 金閣の秋 |
| 第三回 梅の宿 |
| 第四回 生ひたち |
| 第五回 鴉の聲 |
| 第六回 南船北馬 |
| 第七回 佛鬼合戦 |
| 第八回 風流三昧 |
| 第九回 歌問答 |
| 第十回 霜くづれ |

説話叢書愈々出て愈々奇飄逸奇抜なる滑稽の源泉。禪界の偉人一休和尚の全生涯は滑稽洒脱なる奇談奇行に富む其奇談奇行や大悟徹底より逆激る處自ら無限の清味無限の眞味、無限の妙味を含みて世道の活教訓悟道の指針たり。本書は快僧一休の全生涯を尤も趣味深く編せる者一讀頷を解し再讀臍を燃る滑稽奇抜なる大和尚の面目飄逸なる奇言奇行を玩味し給へ。

發 行 所 京 都 高 倉 市 五 條 入 法 文 館 振 替 五 五 大 阪 六

菅 瀨 徹 教 大 家 著 安 藝 目 録

信 仰 界 の 著 名

菅瀨芳英先生著

實 驗 の 信 仰

四六版天金
上製全一冊
裝頑頗美本

正價 金八拾五錢
郵税 金八 錢

昔から百聞一見にしかすと云ふ事がありますが特に宗教の事はさうであらうと存じます、吾々が御説教を聞ひても御聖教を読みましても生きくした感じを得られないのは實驗の聲でないからであります、現代の事でないからであります、しかるに本書は、現今の佛教界で珍らしい信仰家徳行家であらせらるゝ菅瀨先生が先年目出度往生を遂げた神戸の豪商福岡久米吉氏の信仰をありのまゝに書いて下さつたものでありますから小供でもわかると共に大學者でも感せず居れない貴い文字有りがたい書物であります、どうぞこれによつて後生の一大事に安堵をして下さい特にねすゝめ致します

親鸞聖人御一代説教

全三冊 特價金七拾錢
郵税金八 錢

宗祖聖人の傳記に關しては未だ完全なる者なし本書は著者が前後十有餘年諸書を涉獵し考證該博精確なる引證のもとに著者獨特の妙辯を奮て適切なる譬喩因縁を交へ聖人御一代の芳蹟を精密しかも通俗平易に説述せし宗祖傳記中尤完全なるものなり (好評第八版)

蓮如上人御一代説教

全一冊 正價金貳拾五錢
郵税金六 錢

本書は中興上人御一代の、御化導及一宗再興御辛勞の事蹟を、諸傳の内より英を摘み華を拾ひ如何なる婦女子も解し易く、辯述せられし良書なり、親鸞聖人御一代記説教と共に眞宗僧俗の必讀あらん事を希望す

蓮上人御奇蹟説教

全一冊 正價金貳拾錢
郵税金四 錢

本書は御一代記説教の、續篇とも云ふべき書にて蓮師御一代の御化導に就て特に奇瑞不思議の事蹟を説教せる書なり非常の高評にて今般第五版を發行す

京 都 市 倉 五 條 通 入 法 文 館 大 阪 四 五 五 六

發 行 所 京 都 市 高 倉 五 條 東 入 法 文 館 振 替 五 五 六 大 阪 五 五 六

善導和讚說教

本書は有名なる説教の大家、東保福專寺の「虎の巻」にして、門生といへども二十年以上にあらざれば、この信心徹到即ち善導和讚は口授せられざるの秘藏書なり、幸に此度師に乞ふて世に公にすることとなり、新なる譬喩を交へ、確實なる因縁を加へ、義文を解し法門を談し、一首々々席を追て説教せられたれば、實に説教の好模範たる良書なり
(好評第四版)

全二冊 正價金八拾錢 郵税金八拾錢

淨土和讚二首說教

本書は師が得意の雄辯を振て淨土和讚中の骨髓たる「十方諸有、若不生者」の二首を二十有餘席に毎席譬喩因縁を交へ辯せられし者なれば眞に説教家の良師友と云ふべし
(好評第八版)

全一冊 正價金貳拾五錢 郵税金四錢

帖外和讚說教

本書は曩に二首説教を著し大に世の高評を博せる師が今回更に帖外和讚を讚題として爽快なる妙辨を以て譬喩因縁を交へ道歌を引用し懇切に説明せられたる良書なり
(好評第三版)

全一冊 正價金四拾錢 郵税金四錢

東保福專寺十題說教

美裝全二冊 正價金五拾錢 郵税金六錢

- 内容
- 一 願力章說教
 - 二 報恩講說教
 - 三 中祖忌說教
 - 四 軍人追弔會說教
 - 五 婦人會說教
 - 六 青年會說教
 - 七 孟蘭盆說教
 - 八 法義引立說教
 - 九 衛生說教
 - 一〇 財團模範說教

東保福專寺は唱導界の霸王古來より播州節にて世に喧傳せられ今に斯道に熱心なる士が笈を負て門に入る者年々數百を下らず本書は同寺先代神子上惠了師が得意の「願力章說教七席」「報恩講說教」及現代必要の諸題に付實地說教せられし同寺秘藏の名説を開放せし斯界に於ける近代出色の良典なり

材良の教布著名の教説

福成寺大仙師著述

譬喩 四十八願説教

全二冊 正價金四拾五錢
郵税金八錢

本書は唱導を以て有名なる福成寺大仙師の述にして、大經四十八願を一願々々、詳細に實地に説教せられしものにて、或は譬喩を以て、或は因縁を以て、或は寓話歌句を以て例の滑稽流暢の辯を振て合法自在滔々辯じ來り演じ去り、さしもの深意も一讀氷解せらる、其輕妙の辯談知るべし

淨信房充賢師著

(最新刊)

譬喩 三首詠歌章説教

全一冊 正價金貳拾錢
郵税金四錢

淨信房師は近世の唱導大家なり師が得意の雄辯を振て四帖目第四通の寶章を十八席に別ち適切なる因縁好妙なる譬喩に合法自在叮嚀懇切を極て説明せし者布教家の好指針たり

同講朝會了昌師著

(好評第三版)

本願成就文法話

全一冊 正價金貳拾錢
郵税金四錢

本願成就文は一宗の淵源にして安心の至極なり苟も如來の慈悲を口にす者之れに依らざるべけんや、本書は學徳兼備はる説教大家朝會了昌師が特意の雄辯を振て嶄新なる譬喩因縁を交へ演述せられし者なれば僧は布教の材料に供し俗は以て正意安心の妙味を愛樂せられんことを

大行寺信曉師著家書

説大原問答勸導

全三冊 正價金參拾五錢
郵税金四錢

本書は昔し法然上人諸宗の學匠達と、大原に於て聖淨二門の大議論をなし、念佛宗の諸法にすぐれたることを、一同に感服せしめられしを、一々詳細に演せられし者なれば淨土眞宗の輩らは必讀すべき良書なり

説五惡段實驗録

全三冊 正價金五拾五錢
郵税金六錢

大經五惡段五善五惡につき、善惡因果の道理より應報善感の理を、博く諸書に照し、理證を擧げ詳細に懇切に辯せられしものにて、説教家の指針たるのみならず、眞宗信徒の諸彦座右に缺くべからざる良書なり

説往生要集勸導辨

全三冊 正價金五拾五錢
郵税金六錢

本書は源信和尚の原著、顯密行法の修難なるを察し、易行念佛に歸し自身出離の捷徑となし、且つ末世の衆生を化益の爲に、撰せられしを、有名なる故大行寺信曉師の和解をなし、通俗に淨土往生の眞理を示されし者にて、布教家の好資料たるは固より、信者が求道の友たるべし

京都市五条通 法文館 振替 大坂四五六

京都市五条通 法文館 電話 二一〇九

眞宗安心法話之良書

釋惠忍師著

五帖 眞宗文章來意鈔

全一冊 正價金參拾五錢 郵税金六錢

（一名 眞宗安心の龜鑑）
 本書は蓮如上人御生涯御勸化の骨目、眞宗安心の龜鑑たる御文章五帖一部八十通の來意、緣起を一通通々に付通俗平易に詳述せし者にて當通僧俗は是非一讀信心決定の階梯とせらるべし
 法善寺實道師著

說安安心精密辯

全一冊 正價金參拾五錢 郵税金四錢

本書は世に有名なる播州法善寺實道師の演述にして、「御文」二帖目第九通の文に由て眞宗の安心を精く述たる若にして、其辯は流暢にして愚昧の者に通じ易く、其言は平穩にして在家の衆生に會得し安く、説かれし書なれば説教家は勿論、苟も眞宗の清流を汲む人は必讀せられべき良書なり

細川了仰師著

說六字釋講話

全一冊 正價金拾八錢 郵税金貳錢

それ六字釋は浄土眞宗の第五祖善導大師の御釋文にして一宗の骨目安心の眞髓なり爰に唱導家を以て有名なる細川了仰師誰人にも六字名號の深意を領得せられ易き様に辯述せられし良書なり

京都市東區通入 法文館 電話二下一九〇

眞宗信者必携の聖典

司教 是山惠覺師編輯

眞宗聖典

三方 總皮特製金 正價金八十五錢 郵税金八錢
 クロス金 正價金六十錢 郵税金八錢
 文字入上製 郵税金八錢

眞宗聖典の尤も完全なる者也
 佛說三部經 ○正信偈三帖和讃 ○五帖一部御文章 ○夏の御文 ○御俗姓御文 ○歎徳文 ○横川法語 ○蓮如上人御一代聞書 ○七祖聖教要文 ○眞宗法要要文

御歴代宗主御眞撰

眞宗假名聖教

和裝帙入 全四冊 正價金九十五錢 郵税金八錢
 洋裝假綴 全四冊 正價金七十五錢 郵税金八錢
 全四冊 正價金十一錢 郵税金八錢

内容
 浄土三經往生文類 ▲尊號眞像銘文 ▲一念多念證文 ▲唯信鈔文意 ▲願々燈鈔 ▲御消息集 ▲歎異鈔 ▲口傳鈔 ▲改邪歸正 ▲執持 ▲須敬重詞 ▲願々土眞要鈔 ▲諸神本懷集 ▲破邪顯正 ▲報恩記 ▲法華問答 ▲浄土存覺法語 ▲持名偈 ▲女人往生聞書 ▲歩船信證 ▲大恩記 ▲法華問答 ▲浄土見聞集 ▲信儀 ▲大意 ▲御一代聞書 ▲安心決定鈔 ▲附錄 ▲反古裏
 眞宗假名聖教は高僧以來先徳の寶訓を採集せしもの迷のあら
 苦海の筏なり、西僧の來人誰か其徳を仰ぎしもの迷のあら
 や、原本三十餘部携持に不便少からず縮刷以て讀者に供す

京都市東區通入 法文館 電話二下一九〇

通俗的佛敎入門の指針

無住庵 守本惠觀居士著

(第四版)

通俗佛敎 世諺百話

全一冊 正價金三十五錢 郵稅金六錢

諺は古來より言ひ習したる自然の敎訓にして人情の機微を穿ち反て格言よりも理解し易く功は却りて多し本書は世諺一百種を撰び百題をあげ經論及古徳の法話和歌等を引用し巧に佛敎の妙趣を説く文は通俗平易にして布敎家の好資料たるは勿論家庭の讀み者として恰好の良書なり

無住庵 守本惠觀居士著

佛敎心學 道歌百首和解

全一冊 正價金二十五錢 郵稅金四錢

古來より有名なる高僧大徳が和歌壹百首に付通俗平易に佛敎の眞髓を語り佛敎入門者の階梯となす

新田龍眼師著

通俗眞宗要旨

全一冊 正價金十五錢 郵稅金二錢

通俗簡明に眞宗の要旨を説明す

因縁説敎の三名著

大高文進師著

説敎 苧萱發心因縁談

全一冊 正價金十五錢 郵稅金二錢

夫れ苧萱道心石童丸の事蹟たるや、誰しも能く之を知れども、多くは浮説に亘り實説を知る人稀なり、本書は尤も正確に親切に其れを記し文字平易誰にても讀み得べく分りやすし、加藤重氏の發心、妻子の父を慕ふ情、高野山の離別等讀み去り讀む來り、情極まりて、潜然涙禁するあたはず、有信の諸氏一覽以て佛法歸入の助縁となされたし

野田憲雄師著

住蓮山 安樂寺 鹿谷因縁談

全一冊 正價金二十錢 郵稅金二錢

本書は法然上人、親鸞聖人御左遷の事蹟、住蓮安樂坊死罪顛末、松虫鈴虫發心の由來を、十席に分ち事實正確にして、通俗に有難く婦女子も讀み易き様辯せし者なり

山田正信師著

親鸞聖人 大滿御修行談

全一冊 正價金六錢 郵稅金二錢

禰師親鸞聖人比叡山御修行の御事蹟を詳く説教せし有難き本であります

諸佛讚歎高僧鑽仰

佛教和讚集

▲通俗平易に佛教各宗の教義を示す▼

(全一冊) 正價金四十錢
郵税金六錢

本書は簡易一切經
とも云ふべく佛教
各宗に付き佛菩薩
經論釋、高僧碩德
安心修行、因縁に
至る迄網羅せしも
のにして一讀容易
に各宗各派の教義
安心を了知すべし
本書は各宗高僧碩
學の選述を蒐集せ
し佛教文學の精華
なり

目次

| | | |
|---------|----------|---------|
| 一天台大師和讚 | 二傳教大師和讚 | 三弘法大師和讚 |
| 四興教大師和讚 | 五達磨大師和讚 | 六承陽大師和讚 |
| 七善導大師和讚 | 八慧心僧都和讚 | 九圓光大師和讚 |
| 十空也上人和讚 | 二同歡喜踊躍和讚 | 三阿彌陀和讚 |
| 三善光寺和讚 | 四觀音和讚 | 五藥師如來和讚 |
| 六歡喜天和讚 | 七不動明王和讚 | 六十三佛和讚 |
| 九地藏尊和讚 | 三西院河原和讚 | 三來迎和讚 |
| 三十五菩薩和讚 | 三釋迦如來和讚 | 三毘沙門天和讚 |
| 三辨才天和讚 | 三因果和讚 | 三血盆經和讚 |
| 三王經和讚 | 三法華和讚 | 三光明真言和讚 |
| 三眞言安心和讚 | 三授戒和讚 | 三曹洞安心和讚 |
| 三菩提和讚 | 三施餓鬼和讚 | 三懺悔和讚 |
| 三黑谷和讚 | 三法然上人花和讚 | 三孝行和讚 |
| 四石女地獄和讚 | 四血池地獄和讚 | 三女人往生和讚 |
| 四中將姫和讚 | 四一谷組討和讚 | 三熊谷發心和讚 |
| 四茹養發心和讚 | 四梅若丸和讚 | 三安珍清姫和讚 |
| 四阿波鳴戸和讚 | 五那智山別願和讚 | 等 |

▲佛教文學の精華集めて本書にあり▼

佛教研究者の指針

文學博士 村上專精師著

俱舍論達意

全一冊 正價金廿五錢
郵税金四錢

起信論達意

全一冊 正價金廿五錢
郵税金四錢

佛教の流派數多あれども小乘各派は世親が俱舍論に藏まり、大乘各宗の教義は皆馬鳴が起信論に基かざるなし、此二論は實に佛教の二大幹本たり、されども難解深妙の書なれば、古來註疏の書數ふるに遑なけれど、なほ初學には入り難し、村上博士の兩達意は高遠の理を説くに達意を主として其要領を述べ大乘小乘の極意を論ず、先に既に世に定評ありしものなり、共に久しく絶版の悲運にありしを這回弊館之を刊行するの光榮を得たり佛教の要領を見て無明を破つて眞如に生せんと欲するものは是に其捷徑を求められよ

電話二九〇番
大替版四五六番

東京市五條通 法文館 高倉東入

電話二九〇番
大替版四五六番

東京市五條通 法文館 高倉東入

眞宗宗典講義の新刊

勸學 檀特教導師述

觀散善義講錄

全一冊 正價金三十五錢 郵税金四錢

善導大師が觀經散善義は眞宗安心の肝要骨目なり本書は平易簡明に其眞髓を發揮し殊に三心釋中「一種深信」就行就人「二河白道」等の安心樞要なる部分は尤も意を注ぎ懇切に明截の講話を施す宗學者は勿論布教家も必讀に價す

勸學 檀特教導師述

裁斷申明書略述

全一冊 正價金十五錢 郵税金二錢

他力安心の要義
本書は享和年間三業大感亂の節本如宗主より僧俗一般へ下されたる裁斷の御書に就て師が最も懇切に講述せられたる良書なり今や異安心問題喧々たる時僧俗共に一本を備へて其正意に就かれん事を乞ふ

勸學 阿彌得聞師著

阿彌陀經講話

全一冊 正價金三十錢 郵税金四錢

阿彌陀經は一宗正依の經典彌陀、釋迦、諸佛の本懷を顯す至要の妙典なり故阿彌勸學が詳かに本經の幽旨を講述せられしものなり

京都市五條通 法文館 電話 二下一〇九番 高倉東入 番六五五四版大替派

◎新時代の人格を指導せんとは本講演集の精神なり
文學博士谷本富先生著 ◎最新版

谷本博士講演集

菊版美裝全一冊
正價參拾五錢
郵税四錢

谷本文學博士は日本新教育界の泰斗にして其の辨説は優に東洋のブライヤン氏を以て目せらる。現に京都帝國大學文科教授にして「宗教々育論」を講述せられ實に我邦現下思潮界の陥欠は教育に宗教を加味せざるに存す、博士夙に此の點に周到なる注意と卓絶なる學識を以て宗教々育の必要を絶叫せられたり。本講演集は博士平常の持論を尤も平易に簡明に而かも組織的に宗教々育の必要を詳説したるものなり。

◎最新宗教學術の趨勢を知らんと者は本書を一讀せよ

272
206

通俗平易な家庭教雜誌の新刊

毎月一回

家のり乃み

一日發行

定價 郵部一錢五厘 年參拾貳錢六拾

最も通俗平易な信仰雜誌を求めん人は 本誌に來れ

綱領

- 一この雜誌はみなさん方の家庭に佛の光を導き入れたいために發行します
- 一まづ巻頭には御講者方の説教や講話を載せ殊更お年寄のために字を大きくしてあります
- 一またお若い方やお子供衆のために面白物語尊い教訓などが澤山に出てをります
- 一その他御婦人方などのために平生必要な事柄は何くれさなく趣味ふかく書いてあります
- 一ですからみなさん方はどうかこれを平和な家庭の友達としてお読み下さい

説教

欄には毎月一乘院吉谷講師の歎異妙説教を初めとして諸大徳の有難き説教を連載します

講話

欄には講師南條文雄師を初めとして高僧碩徳の懇篤なる講話を掲げます

譚叢

欄には妙好人傳や物語逸話、安心小品など有益にして而も趣味あるものを滿載致します

家庭

欄には眞宗信者の家庭をして圓滿平和ならしめんがために家庭講話を初めとして衛生料理の末に至るまで必要なことは悉く載つてゐます

詞藻

欄には和歌俳句の類を載せ家庭の趣味を助けてゐます

附録

として特に眞宗信者としては是非心得て居られねばならぬ程度に於て通俗平易に宗義安心の解釋を連載してあります

一家庭悉く打揃て法味を愛樂せんと欲せば本誌を求めよ

發行所 京都市東區通入 法文館 電話 〇九一二 番六五五四阪大座口替振

終

